アール・ブリュット2023巡回展

ディア ストーリーズ

ものがたり、かたりあう

Art Brut 2023 Touring Exhibition
Dear Stories: Tales and Talks

アール・ブリュット 2023 巡回展
ディア ストーリーズ　ものがたり、かたりあう
Art Brut 2023 Touring Exhibition
Dear Stories: Tales and Talks

展覧会
企画：大内郁（東京都渋谷公園通りギャラリー）
担当：大内郁、佐藤真実子（東京都渋谷公園通りギャラリー）
担当補助：杉千種、山口里佳（con*tio）
会場構成：株式会社ドットアーキテクツ
デザイン：ウミノタカヒロ（MUTE）
広報物印刷：関東図書株式会社
広報：加藤志保、岡田なつき（東京都渋谷公園通りギャラリー）

カタログ
企画・執筆：大内郁、佐藤真実子
デザイン：ウミノタカヒロ
編集協力：con*tio
翻訳：株式会社イデア・インスティテュート
印刷：株式会社サンエムカラー
発行：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー
発行日：2024 年 3 月 19 日

Exhibition
Curator: OUCHI Kaoru (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
Staff: OUCHI Kaoru, SATO Mamiko (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
Assistant: SUGI Chigusa, YAMAGUCHI Rika (con*tio)
Exhibition Space Design: dot architects
Graphic Design: UMINO Takahiro (MUTE)
Publication Printing: Kanto Tosho Co.,Ltd.
Press Officer: KATO Shiho, OKADA Natsuki (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Catalogue
Texts: OUCHI Kaoru, SATO Mamiko (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
Translation: IDEA INSTITUTE INC.
Design: UMINO Takahiro
Editorial Assistance: con*tio
Printed by: SunM Color Co., Ltd
Pubulished by: Tokyo Metropolitan Government
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Publication Date: 19 March 2024

©2024 Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

アール・ブリュット2023巡回展

ディア ストーリーズ

ものがたり、かたりあう

Art Brut 2023 Touring Exhibition
Dear Stories: Tales and Talks

● 第1会場
すみだリバーサイドホールギャラリー
2023年9月24日（日）- 10月4日（水）

● 第2会場
東京都渋谷公園通りギャラリー
2023年10月21日（土）- 12月24日（日）

● 第3会場
たましんRISURUホール
（立川市市民会館）展示室
2024年1月24日（水）- 2月7日（水）

● 出張イベント
プリモホールゆとろぎ
（羽村市生涯学習センター）展示室
2023年11月26日（日）

Sumida Riverside Hall Gallery
Sep. 24 (Sun.) - Oct. 4 (Wed.), 2023

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery
Oct. 21 (Sat.) - Dec. 24(Sun.), 2023

TAMASHIN RISURU Hall（Tachikawa City Civic Center）Exhibition Room
Jan. 24 (Wed.) - Feb. 7 (Wed.), 2024

Hamura City Lifelong Learning Center Primo Hall YUTOROGI
Nov. 26 (Sun.), 2023

主催：東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー（公益財団法人東京都歴史文化財団　東京都現代美術館）
協力：立川市、羽村市教育委員会　後援：墨田区

Organizers: Tokyo Metropolitan Government and
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo of Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Cooperated by: Tachikawa City, Hamura City Board of Education　Supported by: Sumida City

ごあいさつ

この度、東京都と東京都渋谷公園通りギャラリーは、アール・ブリュット＊2023 巡回展「ディア ストーリーズ　ものがたり、かたりあう」を開催いたします。本展では、独創性あふれる表現方法が近年国内外で注目される７名の作家を、都内３か所に巡回して紹介します。

自らの存在を確かめるような「語り」から、他者と共有できる「物語」まで、人は日々さまざまな「ものがたり」とともにあります。本展が、作家それぞれの創作の過程や作品世界における「ものがたり」を味わうことを通じ、新たにアール・ブリュットの作品の魅力に出会っていただく場となれば幸いです。

土粘土を使って、思いを寄せる人の姿を架空の関係性やストーリーを込めてかたどり続ける鎌江一美。ビールの空き缶を素材に、人生の可笑しみや哀愁をにじませる唯一無二のからくり人形を作る富永武。畑中亜未によるクレヨンの強い筆致で描く画にあらわれる、暮らしの断片へのまなざしと詩的な趣。hideki による長期に渡り作り進めてきた空想の「街」と、その増殖や解体の熱量の痕跡。宇宙や歴史を題材として俯瞰した時空間を描き出す松本寛庸。確固たる存在感の色鮮やかな鳥を描き、夢想する世界を彩るミルカ。高度経済成長期の建設現場での労働を経て、記憶のなかのモチーフを方眼紙に繰り返し描き続けた山﨑健一。
７名の作家の創作や作品は、それぞれに独自の体験を通じた「語り」の姿と、新たに「物語」として広がる地平とが織り交ざりながら存在し、わたしたちの感性や想像力を多面的にかつ豊かに刺激します。

本展が、「ものがたり」への思索を通じて多様な人の創造性との出会いをつくり、語り合う機会となることを願います。

最後になりますが、本展開催にあたり、貴重な作品をご出展いただきました作家の皆さま、多大なご協力を賜りました関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

2023年9月
主催者

＊ アール・ブリュット（Art Brut）とは、元々、フランスの芸術家ジャン・デュビュッフェによって提唱されたことばです。今日では、広く、専門的な美術の教育を受けていない人などによる、独自の発想や表現方法が注目されるアートを表します。

凡例

作品の情報は、東京都渋谷公園通りギャラリーの調査したデータに加え、
作家と所蔵者から提供されたデータを参照した。

作品リストには、作家別に、「図版番号」、「作品名」、「制作年」、「材質・技法」、
「サイズ（縦・高さ × 横・幅 × 奥行、cm）」、「所蔵先」の順に記載した。

作品リストに記載した作品には、図版が掲載されていないものも含まれている。

各作家ページの作品キャプションには、「図版番号」「作品名」、「制作年」、
「技法・材質」「サイズ（cm）」を記載した。

作家解説は大内郁（東京都渋谷公園通りギャラリー）が執筆した。

コピーライト / 写真クレジットは、巻末に記載した。

Notes
Information on the artworks is based on the data provided by the artist and the collector,
in addition to the data researched by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

List of works includes, by each artist, the information for each artwork is given in the following order:
Catalogue Number, Title, Date, Materials, Size (height×width×depth, cm), and Collection.

The list of works includes works not featured in this catalogue.

The Caption of each artist's page is given in order of Catalogue Number,
Title, Date, Materials, Size (height×width×depth, cm).

The artist commentary was written by OUCHI Kaoru（Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery）.

Copyrights and photo credits appear at the back of the catalogue.

表紙作品：畑中亜未《無題（スーパームーン）》制作年不詳、部分
Work on the cover: HATANAKA Tsugumi, *Untitled*（*Super Moon*）, Date unknown, Detail

謝辞

本展覧会の開催にあたり
ご協力を賜りました下記の関係者の皆様をはじめ
お名前を記すことのできなかった多くの皆様に
心よりお礼申し上げます。
（順不同／敬称略）

鎌江一美　桐葉朋子　永橋由理
富永武　上田假奈代　松本一美
畑中亜未　上村喜紀　水野浩世
hideki　窪田健介　水村喜美子
松本寛庸　小和田直幸　山﨑寛
ミルカ　佐藤久美子　山下完和
清水征也　山田健太郎
津口在五　横井悠

YELLOW
社会福祉法人あむ 生活介護事業びーと
社会福祉法人グロー（GLOW）
社会福祉法人創樹会 鞆の津ミュージアム
社会福祉法人戸田わかくさ会 福祉作業所ゆうゆう
社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房
特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
認定特定非営利活動法人もうひとつの美術館

アール・ブリュット立川実行委員会

墨田区
立川市
羽村市教育委員会

アール・ブリュット 2023 巡回展
「ディア ストーリーズ ものがたり、かたりあう」をふりかえる

大内 郁 (東京都渋谷公園通りギャラリー 学芸員)

本巡回展は、「アール・ブリュット」の多様な創造と魅力を東京都内で広く知っていただくことを目的とし、東京都と東京都渋谷公園通りギャラリーが主催する事業である。2023 年 9 月 24 日に墨田区のすみだリバーサイドホールギャラリーで開幕、10 月 21 日からは東京都渋谷公園通りギャラリーでのメイン開催となり、この間関連イベントや、11 月 26 日には羽村市のプリモホールゆとろぎ（羽村市生涯学習センター）展示室にて出張イベントを開催した。2024 年 1 月 24 日から 2 月 7 日までの立川市のたましん RISURU ホール（立川市市民会館）展示室での開催を終え、都内 3 区市の協力を得た巡回展として全会期を閉幕した。

参加作家には、国内外での展示歴を多く有する鎌江一美、畑中亜未、松本寛庸、ミルカ、山﨑健一と、新たにその表現が注目される富永武、hideki が加わり、専門的な美術教育によらずに独自の表現を開拓しその創造性を発揮する 7 名の作家の作品世界を紹介する機会となった。

本展覧会のテーマである「物語／ものがたり」は、アール・ブリュットの作家の創作の動機や作品のあり方の一つの代表的なものとして、語り／ナラティブの要素を考えるところから始まった。他者の物語ではなく私自身の、個別の私が語る「ものがたり」とは、それぞれの声やことばを想起させながら多様な存在があきらかになる契機となる。今日では、ダイバーシティへの価値転換に勇気を与える一つの大きなトピックでもある。[1]アール・ブリュット作品の多くが、作者である「私」の「ものがたり」としての様相を帯びて表現されるのは、まさに作者自身のライフストーリーと分かちがたくある創作だということと関係するだろう。一方で、作者ではない私たちが作品を目の当たりにしたときに、湧き上がる喜びや没入感はなぜ生まれるのか。他者同士が共感、共有しうる、あるいは触発されうる「物語」としての性質やその可能性をここに捉えることができるだろう。アール・ブリュット作品における、私だけの「ものがたり」性と、共にある「物語」性、その両者のダイナミズムについて、本展を通じて考えるきっかけとなれば幸いである。

信楽焼で知られる滋賀県甲賀市にあるやまなみ工房で、土粘土を使い、鎌江一美が作り続ける「まさとさん」の作品シリーズは、突起や毛並みを表すような粒が全身を覆い、土偶のように柔和で豊かな表情をもつ、偶像化された人物が象られた作品群だ。一体一体が「まさとさん」だが、今回はその一つ一つに「まさとさん」との思い出であるかのような、フィクションのストーリーが重ねられていることに注目した。旅行のガイドブックを参考に、念入りにこの物語を生み出す楽しみこそが、鎌江の創作の始まりにあるのかもしれない。

富永武が、ビールの空き缶で手製のからくり人形を作り始めたのは、60 代半ばに大阪・西成区で生活を始めてからだ。詩人の上田假奈代らがこの地で続けるココルームという稀有なアートセンターとの出会いが富永の創作意欲につながっている。日雇い労働者を支えた町は高齢化し孤独の課題も抱えるが、この地域で表現や創造の場が開かれてきた。手酌で酒を嗜む擬人化された《通天閣》（図版 18）のアイデアから電気回路を駆使した光や音の効果まで、人を楽しませたい一心の富永の作品づくりの背景に、この町に起こりつつある再生の物語が重ねられる。

畑中亜未は、暮らしの中での「機微」を捉え、色や形、言葉で魅せる。会場では 48 点の作品がパノラマのように配置され、畑中が描くさまざまなモチーフを俯瞰的に臨むことのできる展示となった。例えば、厳冬の夜道に街路灯の光が浮き立つ高揚感、路上でたまに見かけていた猫の行方や鉢植えの花が咲くのかどうかの気がかり、スーパーマーケットで果物を選ぶときの逡巡、といった断片的な人の心の営みが、畑中が描き出す画面を通じてよみがえり、それぞれの物語として始まる。

hideki のジオラマ作品《北仙台駅》（図版 67）は、「完成」をめざす創作物とは一線を画して、時とともにその様は変化し更新されていくだろう。hideki は道路、建物、電柱、信号など公共の構造物に関心があり、近隣で変化があれば、家族とともに現場に向かい様子を観察するほどだ。実際の町や土地に起こる「変化」を知ると、ジオラマに向かい、木片やプラモデルの端材、ボンドなどを用いて、加えたり更地にしたりと独自の再現が試みられる。ジオラマというステージで繰り広げられる「ものがたり」は、見る者に果てしない物語を提供する。

松本寛庸は興味をもった事柄について、図鑑やインターネットで調べ、知識や関心を深めながら絵を描く。本展では、「時の流れ」を図示的に描いた《過去》《現在》《未来》の連作（図版 78,79,80）や「宇宙」の始まる瞬間、三国志に登場する「赤壁の戦い」を描いた《国盗絵巻Ⅱ》など歴史的な「戦」を素材とした作品から展示された。一定の筆圧での細い線でモチーフの輪郭を捉え、細かく区切られた枠の内側を丁寧に塗り込んだりドットで表したりする描法は共通し、対象の記号的な捉え方とともに、画面の二次元性やポップさが特徴だ。壮大なテーマに独自の解釈を加え、叙事としての「ものがたり」が展開される。

ミルカは自宅で飼われていたインコとの出会いを始まりとして、色彩豊かな鳥類の世界に魅了された。地球上に生息する多種多様な鳥が、現在のミルカの中心的モチーフである。作者は鳥を描く理由として「かわいさ」を挙げるが、「かわいい」ものを描くことへの確信がミルカの創作を一筋貫く強さである。それは作者が傾倒するアニメ文化との接続点であり、今日的で独特な創造の源だ。近作では、細かい音符を連ねるミルカ独特の背景に、浮き出るモチーフとして、好きな菓子やマンガをアレンジした模様が描かれるなど、自身を率直に物語る世界観の投影が試みられる。

新潟県の農村に生まれた山﨑健一は高度成長期の只中に都会の建設工事現場で働いた。当時、方眼紙にコンパスや定規を使って正確な線を引いて仕上げる「設計図」との出会いがあったのかもしれない。病を得た後半生の日々、自ら方眼紙を選び、まるで設計図を書くような緻密さで線を引き、彩り、ユーモラスなイラストや他者には読解不能な記号的な装飾を加え、かつての仕事を彷彿とさせる大型船や重機や管制室を繰り返し描いた。同じ画面上に故郷の風景に広がる稲や花に見える植物も表され、その組み合わせは不自然だが、山﨑の前半生のストーリーを投影している。自身の記憶をたどりながら自身の存在を確かめるように表現を重ねる、ライフストーリーの「語り」がここにあるのではないだろうか。

上記のような、7 名の作家の「物語／ものがたり」の作品世界をきっかけとして、さらに語り合える場としての展示会場を創り出すため、人々が集う「公園」のような空間を体現する展示デザインを dot architects による提案のもと実現させた。関連イベントでは多彩なゲストによるトークやワークショップに加え、本年の特筆点としては、障害のある方等のさらなる会場へ

のアクセスを創り出す試みとして「分身ロボット『OriHime（オリヒメ）』といっしょに鑑賞ツアー」や「視覚障害のある方のための鑑賞ツアー」を開催し、実施にあたり多様な個人や団体との協働を図った。様々な身体性や感知のあり方、状況にある方々が芸術文化活動に参加するため、文化施設ではアクセシビリティの取組を進めている。今回、これまでに美術館の鑑賞ボランティアを長年続けている方々や、視覚障害のある当事者のアドバイザーとともに意見交換の会議を重ねながらプログラムを作成したことで、コミュニケーションを交わし相互の理解を深められたことが、大きな成果であると考える。また、立川会場では地域のアール・ブリュット作家の作品展示を同時開催[2]するという協働を行い、巡回会場として初めての試みとなった。最後となるが、全体を通じて、多様な主体との協力や協働により本巡回展が成立したことを、改めてここに記しておきたい。

[1] ここでは、近年のポーランドの作家オルガ・トカルチュクによる、現代的な多声的な「語り」の状況への考察を参照している。トカルチュクはそのなかで、改めて西洋文明における主体としての「私」の発見に触れ、それが基となる「一人称の語り」を人類の文明の最も偉大な発見の一つだと説く。それは「個人として、自律の感覚を持つこと、自分と自分の運命に意識的であること（オルガ・トカルチュク、2021、『優しい語り手 ノーベル文学賞記念講演』小椋彩・久山宏一訳、岩波書店、p.8）」だ。ダイバーシティを考えるときには、上記の議論に立ち返ることが重要である。

[2] 「アール・ブリュット立川－ともに歩んだアートの軌跡」展（主催：アール・ブリュット立川実行委員会 共催：立川市）が、本展の立川会場である展示室内の一画にて、本展と同期間開催された。

アール・ブリュット2023巡回展

ディア ストーリーズ

ものがたり、かたりあう

Art Brut 2023 Touring Exhibition
Dear Stories: Tales and Talks

出展作家

鎌江一美
KAMAE Kazumi

富永武
TOMINAGA Takeshi

畑中亜未
HATANAKA Tsugumi

hideki
hideki

松本寛庸
MATSUMOTO Hironobu

ミルカ
MIRUKA

山﨑健一
YAMAZAKI Kenichi

鎌江 一美
KAMAE Kazumi

1966年滋賀県生まれ

鎌江一美は、1985 年に地元の滋賀県甲賀市にある「やまなみ工房」に通い始めた。2006 年から土粘土による作陶を始め、最初は思いつく動物を形づくることが多かった。2008 年頃、明らかなきっかけは分からないが、モチーフが人になった。その頃から現在まで、鎌江が 15 年ほどに渡り継続して制作しているのが、やまなみ工房の施設長をモデルにした「まさとさん」のシリーズである。いまでは、「まさとさん」とともに「わたし」がこのシリーズの主要な登場人物である。作品の中で「わたし」と「まさとさん」は仲睦まじい姿を惜しみなく披露する。このテーマに飽きることはないと鎌江は言う。鎌江の作る人物像は、まず、その大部分を覆う豆粒大の突起に圧倒されるが、これは「まさとさん」の髪やネクタイの柄などへの関心をきっかけとして、その特徴を表そうとする表現上の工夫と試行錯誤から始まった。それぞれの作品には、旅行や四季折々の行楽、日常のささやかな出来事の場面が描かれる。平和なときを過ごす「わたし」と「まさとさん」からは、人と人のあいだの思慕や友情へのイマジネーションが広がる。現実と創作を行き来しながら、鎌江の「ものがたり」が展開されている。
代表的な参加展覧会として「アール・ブリュット・ジャポネ」(2010−2011 年、フランス、パリ、アル・サン・ピエール)などがある。

Born in 1966 in Shiga Prefecture. Kamae Kazumi started attending Atelier Yamanami in her hometown of Koka City, Shiga Prefecture, in 1985. There she began working with clay and making ceramics. At first, she often made the shapes of whatever animals came to mind. Although the specific cause is not clear, around 2008 her work shifted to human shapes. In the 15 years since, Kamae has continued to create her series of clay figures modeled after "Masato-san," director of Atelier Yamanami. Currently, in addition to Masato-san, she herself has also become an important recurring character in this series. Her works now include unabashed displays of friendship and closeness between herself and Masato-san. Kamae says she never tires of this theme. One of the most striking features of the figures Kamae creates is the countless tiny clay protuberances covering most of their surfaces. This style emerged after Kamae became interested in the textures of Masato-san's hair and the pattern of his neckties, and are an evolution of repeated experiments in expressing these features. Her works depict trips, seasonal excursions, and small everyday events. Images of herself and Masato-san spending peaceful moments together spur imaginings of friendship and the affection between two people. Kamae's stories unfurl as the goes back and forth between reality and artistic creation.
Representative exhibitions she has participated in include *Art Brut Japonais*, held between 2010 and 2011 at the Halle Saint Pierre in Paris, France.

8

ラーメンを食べに行く私とまさとさん
2021
陶土
27.5×25×27

Me and Masato-san Going to Eat Ramen
2021
Clay
27.5×25×27

KAMAE Takashi
クリスマスの日に
一緒に集ってきたきとさんと私
Mushroom and Me
Gathered Together Over Together
Symphony Christmas

富永 武
TOMINAGA Takeshi

1948年大阪府生まれ

富永武は中学校を卒業後、さまざまな仕事をしながら人生を歩んできた。60 代半ばに差し掛かった 2013 年頃から、日雇い労働者のまち「釜ヶ崎」として知られる大阪・西成区で生活を始める。月に 20 日は図書館に通う読書好きの富永は、あるとき、図書館でふと手に取った写真集で「西洋からくり人形」に出会い、自分もこれを作ってみようと思った。材料費はかけられないので、飲み終わったビールの空き缶を素材とすることにした。1 作目として完成したのは小さな通天閣だったが、知人に初めて見せたときの反応をよく覚えている。「これはすごい」と褒められたからその後の制作が続いたと思う、と富永は当時を振り返る。同時期、釜ヶ崎に拠点を置き、詩人・上田假奈代らが展開する「ココルーム」やそこで開催される「釜ヶ崎芸術大学」の存在も富永の創作意欲を支えてきた。作る作業は早朝から正午まで。アルミ缶を切り、紙のようにまっすぐに伸ばした素材を準備することから始まる。設計図はなくフリーハンドの創作だ。添えるメッセージに工夫をこらし、視覚や聴覚の効果を狙い光や音も取り入れている。唯一無二のからくり人形が世に出ることはいつも嬉しいと富永は話す。
代表的な参加展覧会として「かたどりの法則」(2018−2019 年、広島、鞆の津ミュージアム)などがある。

Born in 1948 in Osaka Prefecture. After graduating from junior high school, Tominaga Takeshi worked a variety of jobs. Around 2013 as he was entering his mid-60s, Tominaga began living in Osaka's Nishinari Ward, which is known as "Kamagasaki", and is home to many day-laborers. A bookworm who visits the library 20 times a month, one day Tominaga came across a photo book of Western automatons. Looking inside, Tominaga felt he could make his own automatons. Lacking the funds for materials, he decided to use his own empty beer cans.The first work he completed was a tiny model of the Tsutenkaku tower. Looking back, Tominaga remembers well the response he got when he showed it to a friend for the first time, who told him that it was amazing. Thanks to this, Tominaga continued to create his art. Around that same time, Tominaga's creative urges were also supported by the Cocoroom facility started by poet UEDA Kanayo and others after she began basing her activities in Kamagasaki, as well as the Kamagasaki Art University program held there. Tominaga creates from morning until noon. He starts by cutting up aluminum cans and flattening them out like sheets of paper. He makes no plans, creating free-hand instead. He puts great thought into the messages that accompany his pieces and makes use of lights and sound for visual and audio effect. Tominaga says that it always makes him happy to release a new unique automaton into the world.
Representative exhibitions he has participated in include *Katadori no Hosoku*, held between 2018 and 2019 at the Tomonotsu Museum in Hiroshima.

18

通天閣（俺が飲まなければ誰が飲む）
制作年不詳
ミクストメディア
45×25.5×22

Tsutenkaku（If I Don't Drink It, Who Will）
Date unknown
Mixed media
45×25.5×22

たどりつくその後の制作が続いたと思う、と富永は当時を振り返る。同時期、釜ヶ崎に拠点を置き、詩人・上田假奈代らが展開する「ココルーム」やそこで開催される「釜ヶ崎芸術大学」の存在も富永の創作意欲を支えてきた。

作る作業は早朝から正午まで。アルミ缶を切り、紙のようにまっすぐに伸ばした素材を準備することから始まる。設計図はなくフリーハンドの創作だ。添えるメッセージに工夫をこらし、視覚や聴覚の効果を狙い光や音も取り入れている。唯一無二のからくり人形が世に出ることはいつも嬉しいと富永は話す。

3

17 / 左ページ
たこ焼大郎
2020頃
ミクストメディア
50×26×26
Takoyaki Taro
ca.2020
Mixed media
50×26×26

12 / 右ページ
通天閣（俺が飲まなきゃだれが飲む）
2017頃
ミクストメディア
45×26×26
Tsutenkaku（*If I Don't Drink It, Who Will*）
ca.2017
Mixed media
45×26×26

畑中 亜未
HATANAKA Tsugumi

1973年北海道生まれ

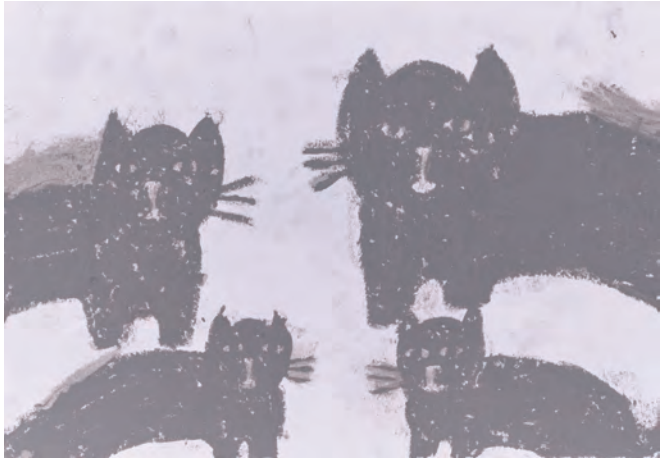
畑中亜未は現在、札幌市内にある事業所「びーと」に通いながら、気が向いたときに絵を描いている。描いて欲しいと請われて描くこともある。幼い頃から絵を描くのが好きだった。畑中の代表作では、さまざまな「灯り」を描くシリーズが知られる。街灯や電球などの「灯り」や「光るもの」への関心は、ある夜に、自宅ベランダのガーデンランプがパッと点灯するのを目撃したことに端を発している。畑中が描くものは、暮らしの中で自身が見聞きして、そっと心に留めていた何かである。畑中が大胆にデフォルメして描くモチーフと、それが「何であるか」を説明する言葉は、クレヨンやプラスチック色鉛筆を使って強い筆致で描く手法や、色面がこすれて表れる効果も相まって、独特の作品の趣を創り出す。世界が陽気に沸き立った「スーパームーン」や、暗く沈んだ大災害や事件のニュース。夜の街を彩るネオンサインに、ピンク色のルージュ、冬の身近な必需品「はだいろのとっくりインナー」。それらは断片的で、ささやかだが、個々の関心の世界はそういったもので成り立っている。一点一点から小さな「ものがたり」が生まれてきそうだ。
代表的な参加展覧会として「アール・ブリュット・ジャポネ」(2010−2011 年、フランス、パリ、アル・サン・ピエール)などがある。

Born in 1973 in Hokkaido Prefecture. Hatanaka Tsugumi attends the Beat welfare facility in Sapporo City and draws when the mood strikes her. She'll also draw if asked to. Hatanaka has enjoyed drawing since she was little. She is particularly well-known for her series of drawings of various lights. Her interest in streetlights, lightbulbs, and various other lights and shining objects began when she witnessed the garden lamp on her home's porch suddenly coming on one evening. Hatanaka also draws other things in her life that quietly hold her attention. The unique atmosphere of Hatanaka's pieces is the result of the subjects she draws in bold, deformed shapes and the words she uses to explain what they are combined with a technique that makes use of strong lines in crayon and colored pencil plus the effect of colors revealed by rubbing the surface away. News of a "super moon" that suddenly made the world a cheerier place, and of dark and depressing disasters and accidents. Neon signs adding color to the city night. Pink lipstick. Familiar skin-colored turtleneck innerwear. Fragmentary, everyday things, yet it is these things that make up the worlds of our individual interests. From them, small stories are likely to be born. Representative exhibitions she has participated in include *Art Brut Japonais*, held between 2010 and 2011 at the Halle Saint Pierre in Paris, France.

55

赤のアップル
制作年不詳
クレヨン、紙
21×15

Red Apple
Date unknown
Crayon, paper
21×15



31 / 上
無題
制作年不詳
クレヨン、紙
19×27
Untitled
Date unknown
Crayon, paper
19×27

42 / 下左
えひめ県産いよかん
制作年不詳
クレヨン、紙
29.7×21.1
Iyokan from Ehime Prefecture
Date unknown
Crayon, paper
29.7×21.1

26 / 下右
青い外灯
制作年不詳
クレヨン、紙
27×19
Blue Streetlight
Date unknown
Crayon, paper
27×19

51 / 上左
新茶の畑
2019
クレヨン、紙
36.5×25.8
Field with First Tea of the Season
2019
Crayon, paper
36.5×25.8

64 / 上右
すみれ（2かぶ）
制作年不詳
クレヨン、紙
25×17.4
Violets (2 Plants)
Date unknown
Crayon, paper
25×17.4

32 / 下
はだ色のとっくりインナー
制作年不詳
クレヨン、紙
21×29.7
Skin-Colored Turtleneck Innerwear
Date unknown
Crayon, paper
21×29.7

津波の絵
(1本)
ピンクの口紅
H12.3月末の有珠山ふんメ
(による津波です。(有珠山
ふんメの地震による津波で
す。)
津波の絵
(2本)
ピンクの口紅
かいた日

hideki

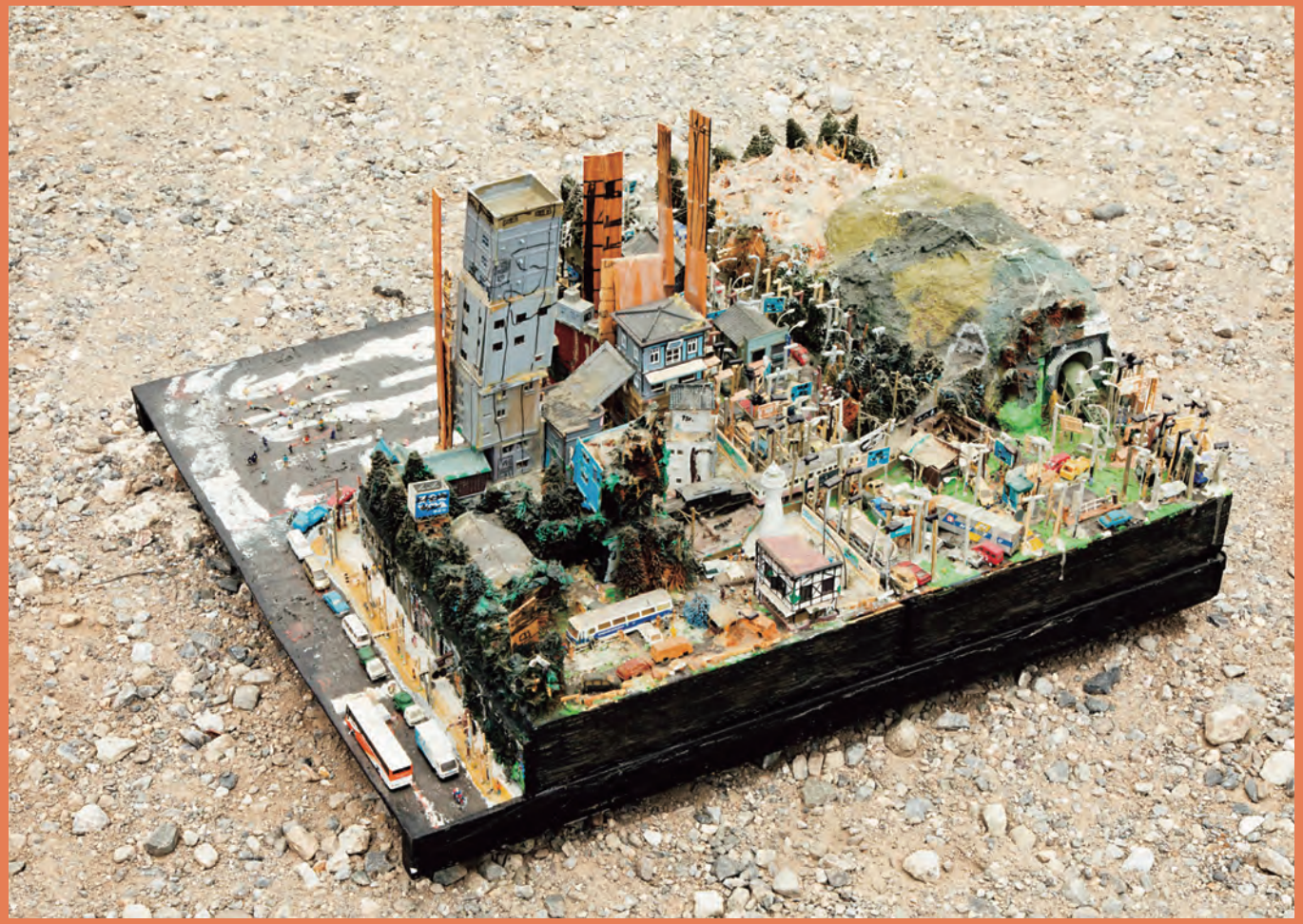
hideki　　1981年埼玉県生まれ

hideki が幼い頃から強く興味を示したものに、町なかの「信号機」や「エレベーターのボタン」がある。自宅周辺の「信号機」や「エレベーターのボタン」はお気に入りの観察対象だった。木片やテープに絵を描き手作りした「エレベーターのボタン」を自宅のあちこちに設置していた面影が今も残っている。hideki は、家族が趣味にしているジオラマづくりに幼少期から親しんできた。展示されている作品《北仙台駅》は、hideki が９年という時間をかけて自宅で制作した空想の街である。「北仙台駅」は実在する駅だが、作者はそこを訪れたことはない。hideki 自身は多くの人に披露するつもりはなかったかもしれないが、作品の中の信号機や街灯が所狭しとあふれる街路、時代や様式の異なる建物の模型や廃材で作ったビルが乱立する様子、ボンドを使って表現された電線が縦横無尽に走る様子など、ジオラマの範疇にとどまらない密度のある異質な世界は周囲を魅了した。《北仙台駅》は、2014 年に現在の姿の倍ほどの大きさで一度完成していたが、その後、hideki の手により新たに変貌を遂げた。きっかけは「電柱地中化」による現実の町の変化に触れたことだ。現在は作品の土地は二つに分けられ、一方は更地のような場所が出現する情景へ、もう一方はさらに細かく解体されて、自室内で電柱地中化が構想される新たな「街」に成長している。
代表的な参加展覧会として「アール・ブリュット☆アート☆日本 2」（2015 年、滋賀、ボーダレス・アートミュージアム NO-MA）などがある。

Born in 1981 in Saitama Prefecture. Since he was little, hideki has expressed a strong interest in traffic lights and elevator buttons. The traffic lights and elevator buttons near his home were his favorite subjects. Traces of the “elevator buttons” made by drawing on scraps of wood and tape he placed here and there around his home can still be seen. Through a family member’s hobby, hideki became familiar with diorama creation from an early age. *Kita-Sendai Station* on display here is an imaginary neighborhood hideki spent around nine years creating in his home. Kita-Sendai is a real-life station, but the artist has never been there. hideki himself may have never intended to show the work to others, but his creation of a dense, unknown world enchants viewers and goes beyond the category of mere diorama with its streets crammed to overflowing with traffic and street lights, models of buildings from different time periods and of differing architectural styles standing in disarray next to buildings built of scrap materials, and a weave of power lines represented with glue running to and fro. *Kita-Sendai Station* once reached around twice its current size in 2014, but was later re-transformed by hideki. Now broken up into two parts, in one half vacant lot-like areas have appeared, while the other half has been dismantled even further and is now growing again as a new neighborhood in hideki’s room. Representative exhibitions he has participated in include *The World of Art Brut in Japan 2*, held in 2015 at the Borderless Art Museum NO-MA in Shiga.

67　北仙台駅
2023
ミクストメディア
36×69×60

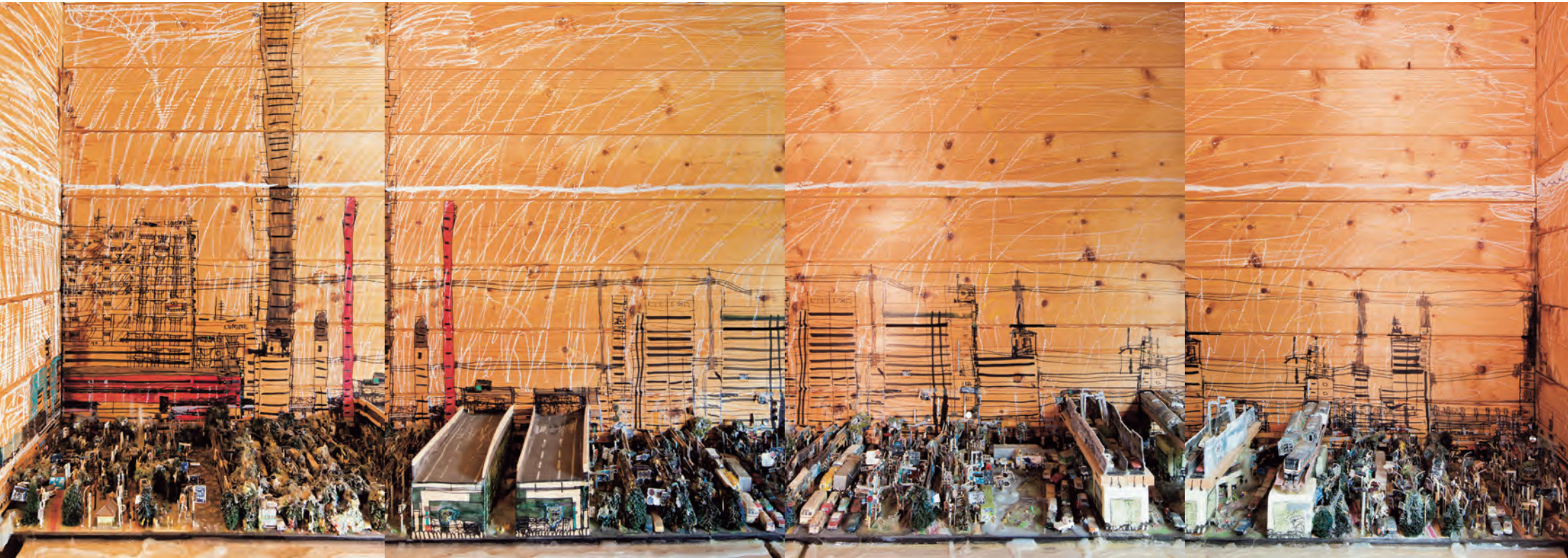
Kita-Sendai Station
2023
Mixed media
36×69×60



LUMINE

H-S hidekiの自宅内で展開されている
もう片方の《北仙台駅》の様子
2023

One side of *Kita-Sendai Station,*
which is being developed
inside hideki's home.
2023



松本 寛庸

MATSUMOTO Hironobu　　1991 年北海道生まれ、幼少期に熊本県に移る

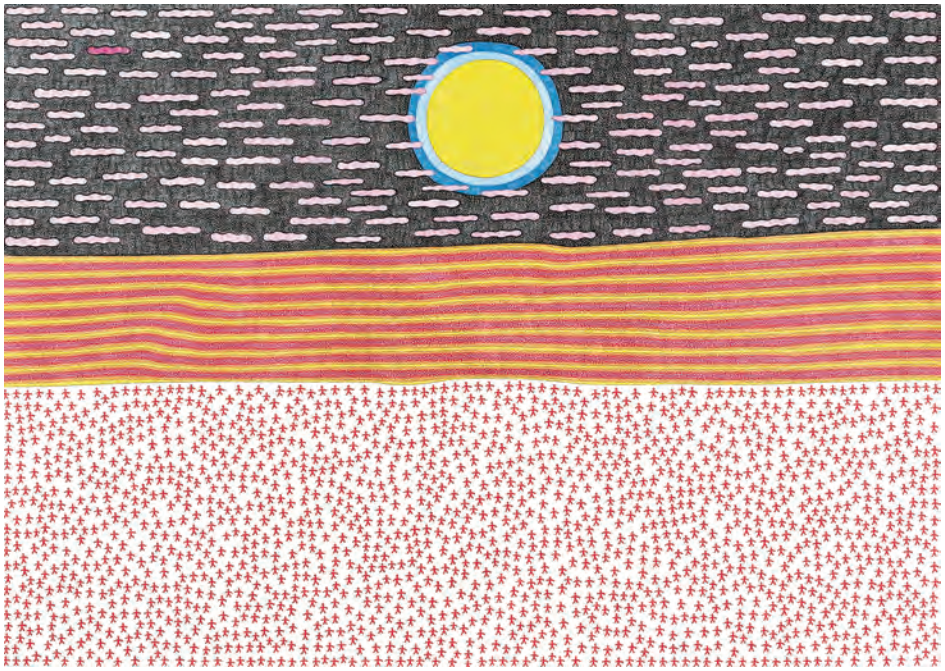
松本寛庸は、日々描くこととともにある。幼少期から、描くことは人とのコミュニケーションの役目も果たしてきた。自宅のアトリエで制作し、色鉛筆 300 本、水性ペン 100 本ほどから迷うことなく色を選び、定規や消しゴムや修正液を使わずに色彩豊かに描く。魚や昆虫、動物など身の回りの生き物への関心から、成長につれ、宇宙や歴史へと興味を広げた。本や図鑑を好んで読み、得た知識は自分なりの解釈で絵のテーマに採用する。松本の旺盛な作画は、早くから地元でも知られていた。小学 6 年生の時に、当時の校長先生が図書室で小さな個展を開いてくれたエピソードもある。近年の松本の作品には、宇宙の仕組みや歴史上の戦乱、時間の流れなど、俯瞰して世界を捉える姿勢が見られる。また、遊戯的な面や、出来事を語っていくような制作にも注目したい。展示作品の《加藤清正と徳川家康の陣取り合戦》(2010-11 年) は、一見デフォルメされた日本地図が描かれているようだが、作者が肥後熊本の大名加藤清正率いる軍勢と江戸を築いた徳川家康の軍勢との架空の陣取りの戦いを頭の中で描きながら、2年をかけて細かく色を塗り進めて出来上がった作品である。
代表的な参加展覧会として「『KOMOREBI』日本のアール・ブリュット」(2017–2018 年、フランス、ナント、リュー・ユニック) などがある。

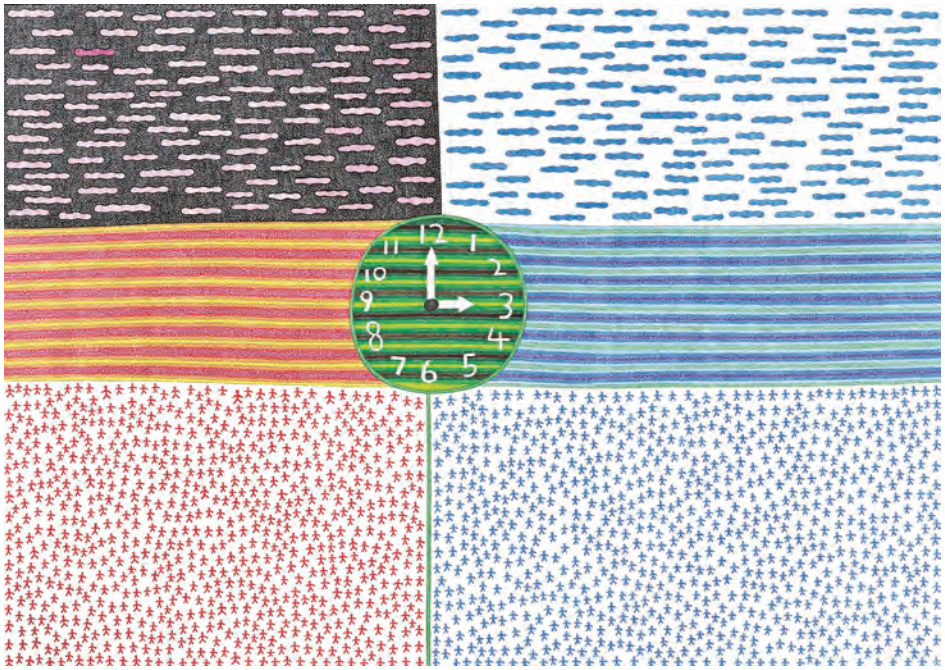
Born in 1991 in Hokkaido Prefecture; moved to Kumamoto Prefecture at an early age. Matsumoto Hironobu spends his days drawing. Since he was little, drawing has also served as a way for the artist to communicate with others. In his home studio, he selects colors without hesitation from among around 300 colored pencils and 100 water-based pens, creating colorful drawings without the use of rulers, erasers, or correcting fluid. Starting with fish, insects, animals, and other familiar living creatures, Matsumoto's interests expanded as he grew to include history and outer space. A lover of books and reference guides, he employs his own unique take on the knowledge gained from these in the subjects of his drawings. Matsumoto quickly became locally famous for his vivid pictures. In the sixth grade of elementary school, the principal of his school even set up a small solo exhibition of Matsumoto's works in the library. In recent, years, Matsumoto's works have tended to take a more high-angled view of the world, featuring subjects such as the workings of space, historical battles, and the flow of time. Attention should also be paid to his works that have a more playful bend and that depict moments of the artist's life. *The Battle Between the Positions of Kato Kiyomasa and Tokugawa Ieyasu* (2010–2011), one of the works on display here, appears at first glance to be a distorted map of Japan. The piece is the result, however, of the artist continually adding small daubs of color while thinking about an imaginary battle between the forces of Kato Kiyomasa, lord of Higo Province; and Tokugawa Ieyasu, who effectively turned Edo (now Tokyo) into the capital of Japan.
Representative exhibitions he has participated in include *KOMOREBI Art Brut Japonais*, held between 2017 and 2018 at Le Lieu Unique in Nantes, France.

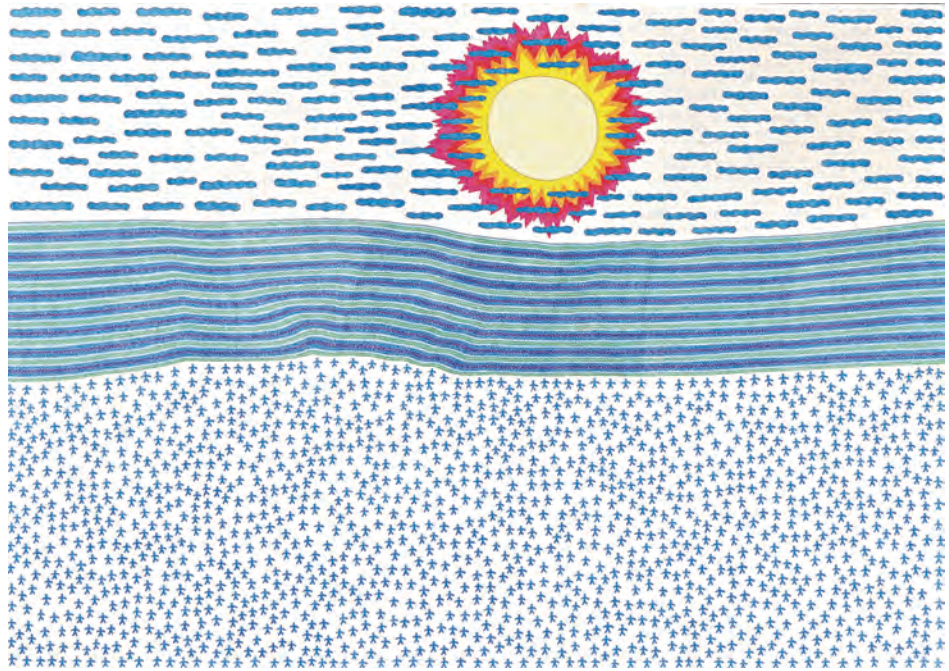
69

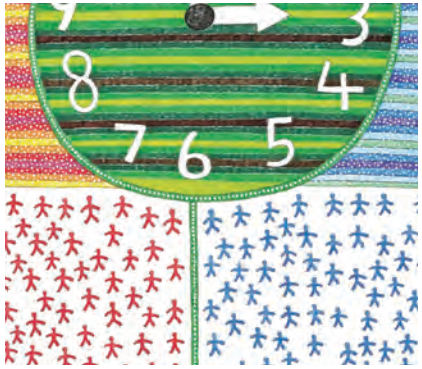
ブラックホール
2012
色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙
38×54

Black Hole
2012
Colored pencil, water-based pen, pencil, paper
38×54









作品ディテール

78 / 左上
過去
2021
色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙
76.6×108.6
Past
2021
Colored pencil, water-based pen, pencil, paper
76.6×108.6

79 / 左下
現在
2021
色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙
76.6×108.6
Present
2021
Colored pencil, water-based pen, pencil, paper
76.6×108.6

80 / 右上
未来
2021
色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙
76.6×108.6
Future
2021
Colored pencil, water-based pen, pencil, paper
76.6×108.6

ミルカ
MIRUKA

1992年大阪府生まれ

ミルカは 2012 年から大阪府にある事業所「YELLOW」で創作活動を続けている。小さな頃から絵を描くことが好きだったが、YELLOW のアトリエで創作を始めた当初は、専らアニメを模したイラストを描いていた。現在ミルカ作品の代名詞ともなっている「鳥」は、すでに頻出するモチーフだった。アトリエで他の作家と活動をともにし、皆の活躍の機会やその姿を目の当たりにしたことがミルカの変化のきっかけとなった。オリジナリティのある創作へと意欲を増していったという。職員の記録には、デッサンの練習をしたいとミルカからの申し出があったことや、どう応えればよいか迷いながら、思いつくまま有名人や動物などいろいろな題材で描く練習を一緒に進めていったことが記されている。この努力の時間が、描くことへの自信を深め、描く楽しさにつながった。ミルカにとって「鳥」とは何か。ミルカが公言するように、つぶらな瞳や美しい鳴き声、綺麗な色の羽をもつ「鳥」は理想の生き物である。画面の中央に置かれ、色彩豊かに描かれる孤高の鳥の姿が印象的だが、楽しげに仲間と戯れている様子や、強さや儚げな様子もさまざまにある。ミルカは「鳥」を描くことを通じて、自己のあり方に向き合い世界を描いているのかもしれない。
代表的な参加展覧会として「日本のアール・ブリュット　もうひとつの眼差し」（2018–2019 年、スイス、ローザンヌ、アール・ブリュット・コレクション）などがある。

Born in 1992 in Osaka Prefecture. MIRUKA has engaged in her artistic activities at the YELLOW welfare facility in Osaka Prefecture since 2010. When MIRUKA first started creating art in YELLOW's studio, she drew illustrations that exclusively modeled the style of Japanese animation. Even at this time, birds, now synonymous with MIRUKA's works, were already a frequent subject. Working alongside other artists and seeing their exhibitions and working styles brought about a change in MIRUKA. It seems that these experiences increased her desire to create works that were more original. Records kept by the staff note MIRUKA asking to practice sketching. At first, the staff were unsure how to help, but going with whatever ideas came to mind, they worked together with MIRUKA to practice drawing celebrities, animals, and a variety of other subjects. MIRUKA's efforts have increased her confidence in her drawings and have also made drawing more fun for her. What are birds to MIRUKA? According to her, birds with cute, round eyes; sweet singing voices; and beautifully colored feathers are the ideal animal. The colorful birds that MIRUKA draws in the center of the scene give off a very proud and aloof air, but she also depicts birds gamboling about playfully in groups, as well as birds with a fiercer aspect. Through her drawings of birds, perhaps the artist is reflecting on her own situation and depicting the world at large.
Representative exhibitions she has participated in include *Art Brut from Japan, Another Look*, held between 2018 and 2019 at the Collection de l'Art Brut in Lausanne, Switzerland.

87

ケツァール
2018
ペン、色鉛筆、鉛筆、紙
72.5×51.5

Resplendent Quetzal
2018
Pen, colored pencil, pencil, paper
72.5×51.5

81 / 左上
フキナガシフウチョウ
2016
ペン、色鉛筆、鉛筆、紙
24.5×35
King of Saxony Bird-of-Paradise
2016
Pen, colored pencil, pencil, paper
24.5×35

85 / 左下
ライラックニシブッポウソウ
2017
ペン、色鉛筆、鉛筆、紙
38×54
Lilac-Breasted Roller
2017
Pen, colored pencil, pencil, paper
38×54

91 / 右上
ルリツグミ
2022
ペン、色鉛筆、鉛筆、紙
55×79
Eastern Bluebird
2022
Pen, colored pencil, pencil, paper
55×79

88 / 右下
ベニフウチョウ
2019
ペン、色鉛筆、鉛筆、紙
72.5×51.5
Red Bird-of-Paradise
2019
Pen, colored pencil, pencil, paper
72.5×51.5

山﨑 健一

YAMAZAKI Kenichi　　1944 年新潟県生まれ、2015 年没

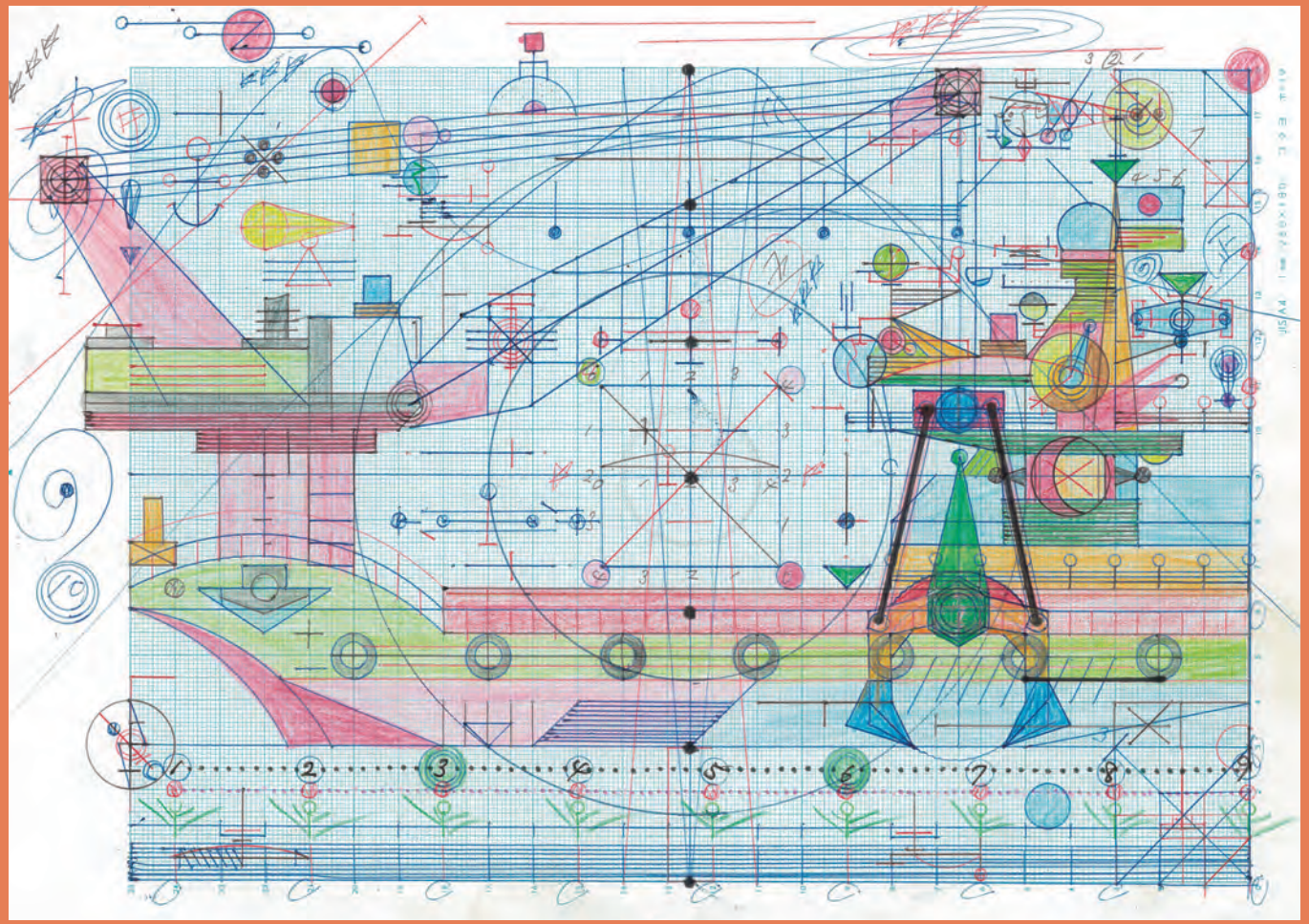
山﨑健一は 1964 年の東京オリンピック開催前後に 20 歳をむかえている。高度経済成長期のただ中にあり、東京が空前の都市化と建設ラッシュに沸き立った時期だ。山﨑は、その頃、ふるさと新潟県の農村地域から都会の建設現場へと季節労働者として働きに出た若者の一人だった。「泥すくいの船」と呼ばれる船に乗る仕事もあったと、後に家族が聞いているが、これは東京湾の埋め立てなどに関わる船での仕事だったとも推測できる。山﨑の弟によると、当時そういった建設労働の従事者の中で、現場の危険さや過酷さも働いて、心のバランスを崩す人が少なからずいたのだという。体調を崩し、ふるさとに戻って入院した山﨑は、病室の机で方眼紙を使って絵を描いた。残された作品は 3,000 点に及ぶ。「泥すくいの船」を表したような大型の船舶や、建設現場で活躍する巨大な重機が繰り返し描かれるが、細部にはユーモラスなイラストの描き込みや、装飾の模様も見られる。工業的なモチーフとともに、時折、ふるさとの田畑を思わせる植物や農機具が描かれたような図も混ざりあう。この連綿と続く画面の数々から、山﨑の記憶の世界を通じた「ものがたり」を受け止めてみたい。
代表的な参加展覧会として「アール・ブリュット・ジャポネ」（2010−2011 年、フランス、パリ、アル・サン・ピエール）などがある。

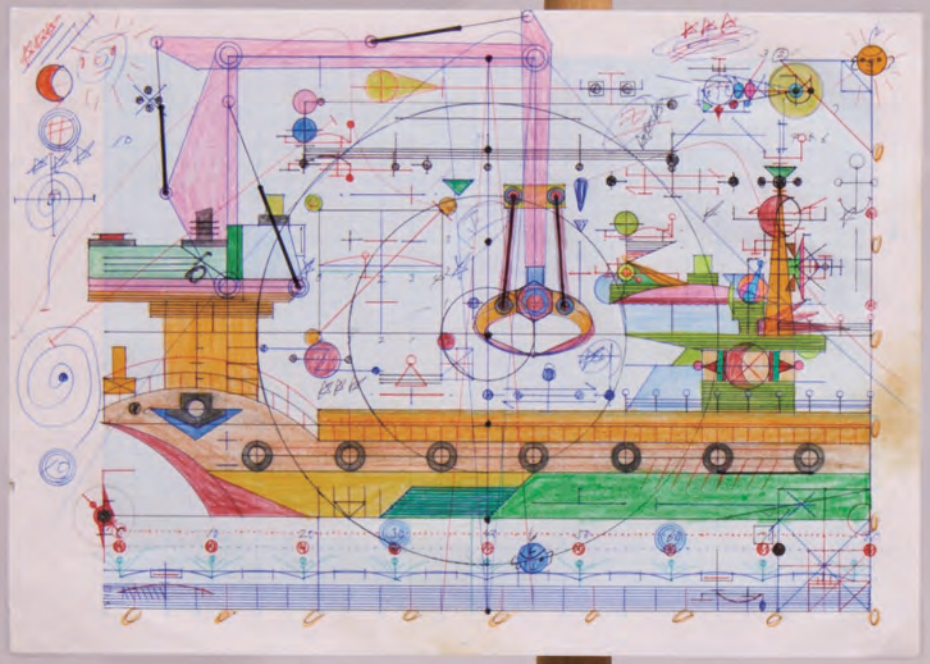
Born in 1944 in Niigata Prefecture, passed away in 2015. Yamazaki Kenichi was around 20 years old when the Tokyo Olympics were held in 1964. It was the very middle of Japan's period of rapid economic growth, a time when Tokyo underwent unprecedented urbanization, exploding with the construction of new buildings. At that time, Yamazaki was a young man who left his hometown in a farming district in Niigata Prefecture to move to the big city as a seasonal construction laborer. His family later learned that among other things he had worked on a boat called a "dredger," which likely means he was involved in land reclamation projects in Tokyo Bay. According to Yamazaki's younger brother, among such construction workers there were those who become mentally ill due to the dangerous and difficult nature of the work involved. When Yamazaki's health deteriorated, he returned to his hometown to be hospitalized. On a desk in his room there, he made drawings using graph paper. In total, he created some 3,000 works. Over and over, he drew large ships likely representing the dredgers he worked on, and huge, heavy machinery used at construction sites, but the details include humorous illustrations as well as ornamental patterns. His industrial themes are occasionally intermingled with figures that look like plants and agricultural equipment reminiscent of the fields of his hometown. Viewers are encouraged to look at the artist's continuous series of images as stories that connect to the world of Yamazaki's memories.
Representative exhibitions he has participated in include *Art Brut Japonais*, held between 2010 and 2011 at the Halle Saint Pierre in Paris, France.

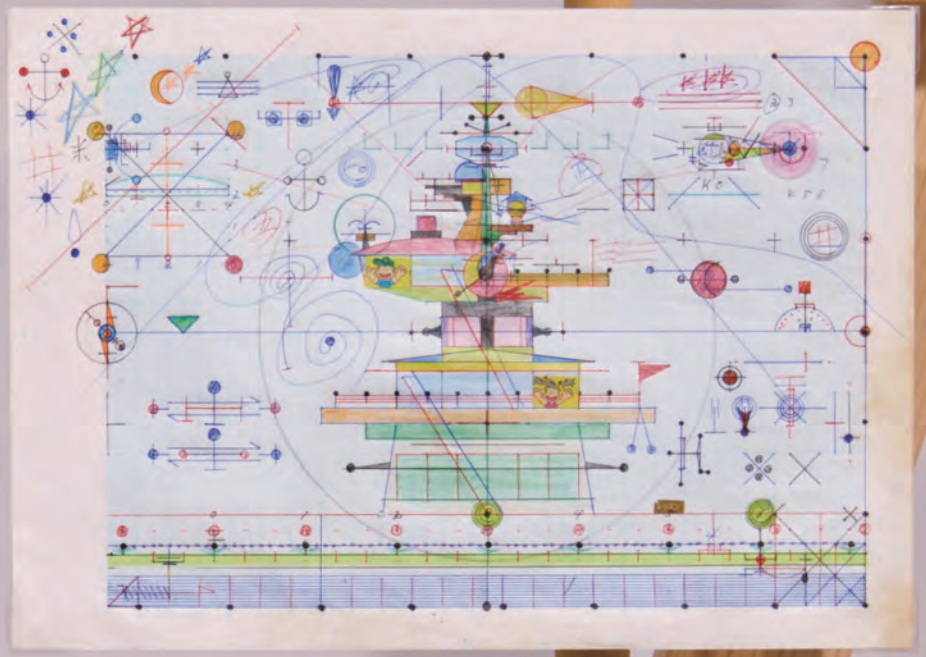
92

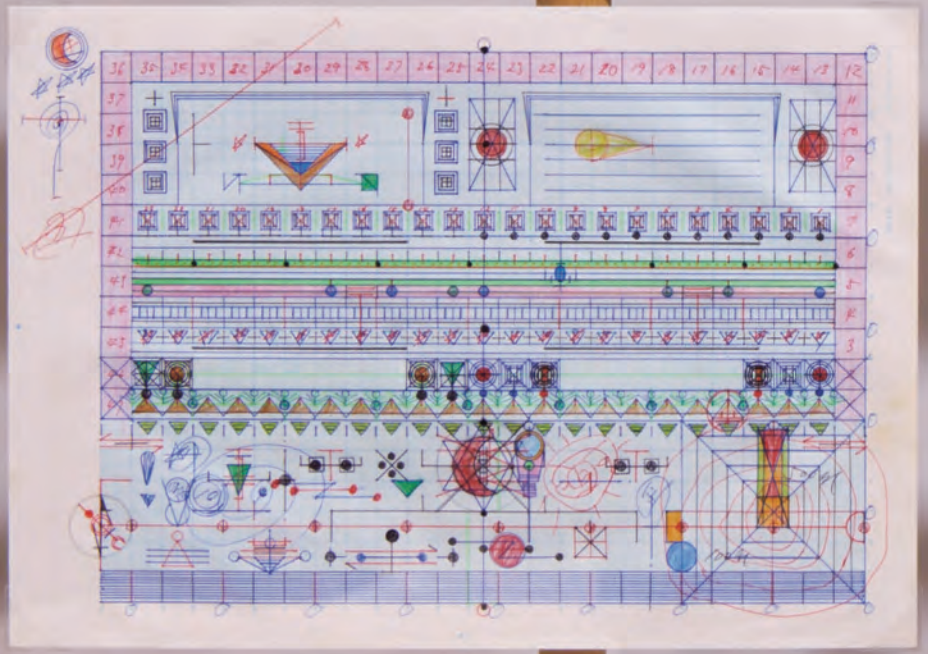
クレーンの船底掘り
制作年不詳
方眼紙、水性ペン、油性ペン、色鉛筆
21×29.7

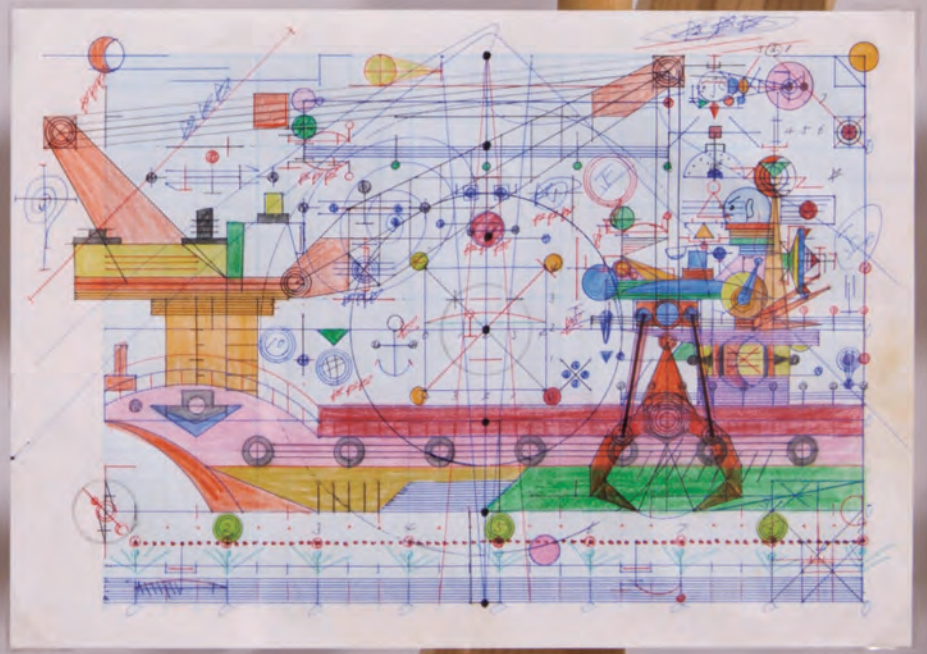
Crane Digging
Into the Bottom of a Ship
Date unknown
Graph paper, permanent and non-permanent makers, colored pencil
21×29.7











各会場風景

渋谷会場　展示室1

渋谷会場　展示室2

墨田会場

墨田会場

YAMAZAKI Kenichi
山﨑健一
1944年新潟県生まれ
2015年没
山﨑健一は 1964 年の東京オリンピック開催前後に、20 歳をむかえている。高度経済成長期のただ中にあり、東京が空前の都市化と建設ラッシュに湧き立った時期だ。山﨑は、その頃、ふるさと新潟県の農村地域から都会の建設現場へと季節労働者として働きに出た若者の一人だった。「泥すくいの船」と呼ばれる船に乗る仕事もあったと、後に家族が聞いているが、これは東京湾の埋め立てなどに関わる船での仕事だったとも推測できる。山﨑の弟によると、当時そういった建設労働の従事者の中で、現場の危険さや過酷さを乗り越えて、心のバランスを崩す人が少なからずいたのだという。体調を崩し、ふるさとに戻って入院した山﨑は、病室の机で方眼紙を使って絵を描いた。残された作品は 3,000 点に及ぶ。
「泥すくいの船」を表したような大型の船舶や、建設現場で活躍する巨大な重機が繰り返し描かれるが、細部にはユーモラスなイラストの描き込みや、装飾の模様も見られる。工業的なモチーフとともに、時折、ふるさとの田園を思わせる植物や農機具が描かれたような図も混ざりあう。この連続と続く画面の数々から、山﨑の記憶の世界を通した「ものがたり」を受け止めてみたい。

立川会場

立川会場

TOMINAGA Takashi
富永武
1948年
大阪府生まれ
富永武は中学校を卒業後、さまざまな仕事をしながら人生を歩んできた。60代半ばに差し掛かった2013年頃から、日雇い労働者のまち「釜ヶ崎」として知られる大阪・西成区で生活を始める。月に20日は図書館に通う読書好きの富永は、あるとき、図書館でふと手に取った写真集で「西洋からくり人形」に出会い、自分もこれを作ってみようと思った。材料費はかけられないので、飲み終わったビールの空き缶を素材とすることにした。
1作目として完成したのは小さな通天閣だったが、知人に初めて見せたときの反応をよく覚えている。「これはすごい」と褒められたからその後の制作が続いたと思う、と富永は当時を振り返る。同時期、釜ヶ崎に拠点を置き、詩人・上田假奈代らが展開する「ココルーム」やそこで開催される「釜ヶ崎芸術大学」の存在も富永の創作意欲を支えてきた。
作る作業は早朝から正午まで。アルミ缶を切り、延ばすようにまっすぐに伸ばした素材を準備することから始まる。設計図はなくフリーハンドの創作だ。伝えるメッセージに工夫をこらし、視覚や聴覚の効果を狙い光や音も取り入れている。唯一無二のからくり人形が世に出ることはいつも嬉しいと富永は話す。

出張イベント　トーク＆オンライン・ツアー　［手話通訳付き］

羽村市にて出張イベントを実施した。前半、学芸員が、アール・ブリュットについて紹介し、後半は、第 2 会場（渋谷）とオンラインでつなぎ、展覧会担当学芸員が、展示の様子や作品について解説した。途中、参加者からの質問もあり相互の対話が生まれた。イベント会場では、展示作家の一人である鎌江一美の作品を鑑賞し、参加者が作品に触れられる時間も設けた。「思ったよりもざらざらしている」などの感想を言い合いながら交流した。

日時：11 月 26 日（日）14:00-15:00
会場：プリモホールゆとろぎ（羽村市生涯学習センター）展示室
主催：東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー
　　（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館）
協力：羽村市教育委員会

トークイベント　［手話通訳付き］

「物語る」ことをテーマに、多様な個々人の生活史を研究する岸政彦が聞き手となり、詩人・上田假奈代が「釜ヶ崎」という街で展開するアートセンター「ココルーム」の活動を中心にトークを展開し、表現活動を通じた人々や街の変化の様子から、作品の魅力やその言語化のむずかしさについてまで、さまざまに話が弾んだ。出展作家の富永武や会場の展示作品についても語られた。

日時：10 月 21 日（土）17:00-18:30
会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 交流スペース
ゲスト：上田假奈代（詩人、釜ヶ崎芸術大学主宰）、岸 政彦（社会学者、京都大学教授）
手話通訳：瀬戸口裕子、山崎 薫

詩のワークショップ

詩人・上田假奈代を講師に、集まった初対面の人同士で、お互いに話を聴き合い、「ひとりでつくらない詩」を贈り合った。様々な背景をもつ人が集い、それぞれの参加者は、他者についての詩を詠む創作体験を通じ、他者を知ることから自己への気づきも得られる機会となった。
日時：10 月 22 日（日） 14:00-16:00
会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 交流スペース
講師／ファシリテーター：上田假奈代（詩人、釜ヶ崎芸術大学主宰）
手話通訳：瀬戸口裕子、山崎 薫
英語通訳：岩谷聡徳、小川顕太郎、桑山 篤

学芸員によるギャラリートーク ［全 3 回、手話通訳付き］

出展作家やその関係者による話を交えながら、担当学芸員が作品や作家の制作について紹介した。途中、参加者からの質問に作家らが受け答えする場面もあり、作家や作品についてより身近に感じられる機会となった。
①10 月 21 日（土） 13:30-14:00
②11 月 18 日（土） 14:00-15:00
ゲスト：富永 武（出展作家）、ミルカ（出展作家）、山下完和（やまなみ工房 施設長）
③12 月 9 日（土） 14:00-15:00
ゲスト：hideki（出展作家）、水村喜美子（出展作家家族）、関係者の方々
　　松本寛庸（出展作家）、松本一美（出展作家家族）※オンライン出演
会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室 1、2
手話通訳：①②瀬戸口裕子、山崎 薫　③伊藤妙子、小徳良枝

視覚障害のある方のための鑑賞ツアー

会場では言葉による説明に加え、4 名の作家の作品を表す触図を用いて、視覚障害のある方に展示作品を鑑賞してもらった。触図は、当事者アドバイザーの助言を受けながら制作した。多様化する障害当事者のニーズのなかで「触ること」の大切さなどを意見交換し、相互交流を深めながらツアーを実施することができた。
日時：12 月 10 日（日） 11:00-12:00
会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室 1、2
協力：一般社団法人タップタップラボ、川村真也

分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」といっしょに鑑賞ツアー

分身ロボット「OriHime」を介して、オンライン参加者と会場参加者が交流をしながら、作品を鑑賞した。障害のある方や遠方にお住まいの方を含め、様々な理由で外出がしづらい方が OriHime のパイロットとなることで、集まった仲間とともに会場での鑑賞ツアーを楽しむ機会となった。また、二つの福祉施設の利用者との鑑賞ツアー（非公開）も実施した。
〇一般応募
日時：11 月 10 日（金） 19:00-20:00
　　11 月 18 日（土） 10:00-11:00
会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室 1、2 およびオンライン
〇福祉施設へのアウトリーチ
①11 月 13 日（月） 10:30-11:30
参加施設：社会福祉法人武蔵野会 リアン文京
②11 月 13 日（月） 13:15-14:15
参加施設：社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会 豊島区立目白生活実習所および同分室ぷらす
方法：オンライン

協力：一般社団法人タップタップラボ

鑑賞ガイド　[全会場]

音声ガイド

展示作品やコンセプトを親しみやすい音声で紹介
出演：森崎ウィン（俳優・アーティスト）

まめガイド

やさしい日本語を用いたわかりやすい文章やイラスト入りで作家を紹介
イラスト：なかむらるみ
デザイン：ウミノタカヒロ（MUTE）
テキスト・編集：con*tio、東京都渋谷公園通りギャラリー

作品リスト

鎌江 一美

1	まさとさん	2009	陶土	33.5×24.4×21.5	やまなみ工房
2	タキシードを着たまさとさん	2012	陶土	33×39×28	やまなみ工房
3	ウェディングドレスを着た私	2012	陶土	30×31×35	やまなみ工房
4	まさとさん	2011	陶土	20×24×55	やまなみ工房
5	まさとさん	2011	陶土	47×47×38	やまなみ工房
6	クリスマスの日に一緒に 過ごすまさとさんと私	2017	陶土	25×20×15	やまなみ工房
7	ISHIYA CAFÉ でパフェを 食べている私とまさとさん	2021	陶土	38×21×26	やまなみ工房
8	ラーメンを食べに行く 私とまさとさん	2021	陶土	27.5×25×27	やまなみ工房
9	ピクニックで一緒にお弁当を 食べているまさとさん	2016	陶土	10×28×55	やまなみ工房
10	まさとさん	2012	陶土	57×28×30	やまなみ工房

富永 武

11	真田幸村 (俺が飲まなきゃだれが飲む)	2017 頃	ミクストメディア	36×25×18	個人蔵
12	通天閣 (俺が飲まなきゃだれが飲む)	2017 頃	ミクストメディア	45×26×26	個人蔵
13	夫婦坂	制作年不詳	ミクストメディア	22×15×22	個人蔵
14	山頭火	2017 頃	ミクストメディア	36×25×16	個人蔵
15	通天閣(人生、泣き笑い)	2017 頃	ミクストメディア	28×19×19	個人蔵
16	からくり熊手	2022	ミクストメディア	68×53×25	個人蔵 / 委嘱作品
17	たこ焼大郎	2020 頃	ミクストメディア	50×26×26	個人蔵
18	通天閣 (俺が飲まなければ誰が飲む)	制作年不詳	ミクストメディア	45×25.5×22	個人蔵

畑中 亜未

19	津波の絵	制作年不詳	クレヨン、紙	21×29.7	作家蔵
20	津波の絵	制作年不詳	クレヨン、紙	21×29.7	作家蔵
21	すーぱーむーん“れっどむーん”	2022	プラスチック色鉛筆、紙	27×19	作家蔵
22	すーぱーむーん“ふつう”	2022	プラスチック色鉛筆、紙	27×19	作家蔵
23	ぐらんどぴあの	制作年不詳	クレヨン、紙	27×19	作家蔵
24	ギター	制作年不詳	クレヨン、紙	27×19	作家蔵
25	ぷらいとぴあの	2022	クレヨン、紙	38×27	作家蔵
26	青い外灯	制作年不詳	クレヨン、紙	27×19	作家蔵
27	青い外灯	制作年不詳	クレヨン、紙	27×19	作家蔵
28	らべんだー畑	2022	クレヨン、紙	27×19	作家蔵
29	青い外灯 I	2022	クレヨン、紙	21×29.8	作家蔵
30	青のネオン灯	2022	クレヨン、紙	19.7×27	作家蔵
31	無題	制作年不詳	クレヨン、紙	19×27	作家蔵
32	はだ色のとっくりインナー	制作年不詳	クレヨン、紙	21×29.7	作家蔵
33	はだ色のとっくりじゃないインナー	制作年不詳	クレヨン、紙	21×29.7	作家蔵
34	むらさきのルージュ	2018	クレヨン、紙	29.7×21	作家蔵
35	NY テロ	制作年不詳	プラスチック色鉛筆、紙	29.7×21.1	作家蔵
36	がすたんく火災	2019	プラスチック色鉛筆、紙	29.7×21.1	作家蔵
37	タンク火災 1964 年新潟地震	制作年不詳	プラスチック色鉛筆、紙	29.7×21	作家蔵
38	東京の地下鉄東西線	制作年不詳	プラスチック色鉛筆、紙	29.7×21	作家蔵
39	シルクハット	制作年不詳	クレヨン、紙	29.7×21	作家蔵
40	はろうぃーんかぼちゃ	制作年不詳	クレヨン、紙	38.1×27.1	作家蔵
41	いよかん	制作年不詳	プラスチック色鉛筆、紙	29.7×21.1	作家蔵
42	えひめ県産いよかん	制作年不詳	クレヨン、紙	29.7×21.1	作家蔵
43	チョコ味のクリスマスケーキ	制作年不詳	クレヨン、紙	38×27	作家蔵
44	イチゴ味のクリスマスケーキ	制作年不詳	クレヨン、紙	38×27	作家蔵
45	シクラメン	制作年不詳	クレヨン、紙	25.2×18	作家蔵
46	線香花火	制作年不詳	クレヨン、紙	38.1×27	作家蔵
47	かきごおりブルーハワイ かきごおりいちご	制作年不詳	クレヨン、紙	27×38.1	作家蔵
48	昭和 56 年の豊平川 (←石狩川水系)はんらん	制作年不詳	クレヨン、紙	25.3×35.7	作家蔵
49	琴似発寒川 [新川水系] のはんらん(1981 年の)	制作年不詳	クレヨン、紙	25.5×36	作家蔵
50	あそびーち石狩の茶色かった海	2018	クレヨン、紙	25.5×36.2	作家蔵
51	新茶の畑	2019	クレヨン、紙	36.5×25.8	作家蔵
52	こがらし	制作年不詳	クレヨン、紙	36.5×25.8	作家蔵
53	秋季の真っ茶茶な連峰	制作年不詳	クレヨン、紙	25.7×36.5	作家蔵
54	ノイチゴ	制作年不詳	クレヨン、紙	21×15	作家蔵
55	赤のアップル	制作年不詳	クレヨン、紙	21×15	作家蔵
56	無題 (スーパームーン)	制作年不詳	アクリル絵具、紙	25×35	作家蔵
57	ピンクの口紅(1本)	制作年不詳	クレヨン、紙	29.7×21	作家蔵
58	ピンクの口紅(2本)	制作年不詳	クレヨン、紙	29.7×21	作家蔵
59	青い街路灯	制作年不詳	クレヨン、紙	25.2×18	作家蔵
60	松ぼっくり (大小の松ぼっくり)<10 個>	制作年不詳	クレヨン、紙	29.7×21	作家蔵
61	青犬	制作年不詳	クレヨン、紙	25.7×18.2	作家蔵
62	青ネコ	制作年不詳	クレヨン、紙	25.7×18.2	作家蔵
63	すみれ(1かぶ)	制作年不詳	クレヨン、紙	25×17.5	作家蔵
64	すみれ(2かぶ)	制作年不詳	クレヨン、紙	25×17.4	作家蔵
65	イナビカリ(細)	制作年不詳	クレヨン、水彩絵具、段ボール	35.6×25.7	作家蔵
66	青いネオン(太)	制作年不詳	クレヨン、水彩絵具、段ボール	25.8×36.3	作家蔵

hideki

67	北仙台駅	2023	ミクストメディア	36×69×60	作家蔵
H-S	hideki の自宅内で展開されている もう片方の《北仙台駅》の様子	2023			撮影： 五十嵐一晴

松本 寛庸

68	超新星爆発	2012	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	38×54	作家蔵
69	ブラックホール	2012	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	38×54	作家蔵
70	ビッグバン	2009	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
71	国盗絵巻Ⅱ	2015	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
72	国盗絵巻Ⅱ	2015	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
73	国盗絵巻Ⅱ	2015	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
74	加藤清正と徳川家康の陣取り合戦	2010-11頃	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
75	加藤清正と徳川家康の陣取り合戦	2010-11頃	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
76	加藤清正と徳川家康の陣取り合戦	2010-11頃	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
77	加藤清正と徳川家康の陣取り合戦	2010-11頃	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
78	過去	2021	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
79	現在	2021	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵
80	未来	2021	色鉛筆、水性ペン、鉛筆、紙	76.6×108.6	作家蔵

ミルカ

81	フキナガシフウチョウ	2016	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	24.5×35	YELLOW
82	カンザシフウチョウ	2016	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	38×54	YELLOW
83	コガネメキシコインコ	2017	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	40×58.5	YELLOW
84	アオフウチョウ	2017	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	40×58.5	YELLOW
85	ライラックニシブッポウソウ	2017	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	38×54	YELLOW
86	アオゲラ	2018	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	40×58.5	YELLOW
87	ケツァール	2018	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	72.5×51.5	YELLOW
88	ベニフウチョウ	2019	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	72.5×51.5	YELLOW
89	ステラーカケス	2021	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	39.5×54.5	YELLOW
90	ハクトウワシと鴉（からす）	2022	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	39.5×54.5	YELLOW
91	ルリツグミ	2022	ペン、色鉛筆、鉛筆、紙	55×79	YELLOW

山﨑 健一

92	クレーンの船底掘り	制作年不詳	方眼紙、水性ペン 油性ペン、色鉛筆	21×29.7	個人蔵
93	クレーンダンプ	制作年不詳	方眼紙、水性ペン 油性ペン、色鉛筆	21×29.7	個人蔵
94 ~ 167	無題	制作年不詳	方眼紙、水性ペン 油性ペン、色鉛筆	21×29.7	個人蔵
168 ~ 169	無題	制作年不詳	方眼紙、水性ペン 油性ペン、色鉛筆	18.2×25.7	個人蔵

Foreword

On this occasion, the Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery are holding the Art Brut* 2023 Touring Exhibition “Dear Stories: Tales and Talks.” This exhibition will stop at three locations in Tokyo to present the work of seven artists whose highly unique and distinctive expressive styles have attracted attention both inside Japan and around the world in recent years.

From narratives that confirm our own existence to tales to share with others, human beings live their days in the company of a variety of stories. We hope that the exhibition becomes a place to newly encounter the fascination of Art Brut artwork through savoring the stories that lie in each artist’s creative process and the worlds of their works.

KAMAE Kazumi continues to model the shape of someone important with a fictional relationship and story using clay. TOMINAGA Takeshi builds one-of-a-kind automatons with empty beer cans, expressing the humor and sorrow of life. The pictures drawn by HATANAKA Tsugumi in heavy blocks of crayon express a gaze toward fragments of life, and a poetic taste. hideki has continued to create fictional neighborhoods over many years, with traces of the passion left behind by repeated building and demolition. MATSUMOTO Hironobu expresses a bird’s-eye view of space-time by depicting outer space and history. MIRUKA draws colorful birds with a bold presence and decorates the world of dreams. And YAMAZAKI Kenichi has continued to depict, on graph paper, the motifs in his memories from construction sites during the period of rapid economic growth. In the creations and works of the seven artists exist the forms of narratives as filtered through each artist’s unique experiences, newly interwoven with their expansion into tales, stimulating our sensitivities and imaginations to make them more abundant. Our hope is that through mediations on stories, this exhibition will serve as a space to come into contact with the creativity of a diverse range of people and serve as the impetus for people to talk.

Finally, on the opening of the exhibition, we would like to express our deep thanks to the artists, who have kindly agreed to exhibit their valuable artworks, and to all those who have offered much cooperation.

September 2023
The Organizers

*Art Brut is a term originally proposed by French artist Jean Dubuffet. Today, it broadly refers to art that is notable for its unique ideas and means of expression, often created by artists who have not received a formal art education.

Reflecting on the Art Brut 2023 Touring Exhibition "Dear Stories: Tales and Talks"

By OUCHI Kaoru, Curator, Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

This touring exhibition, a collaborative project organized by the Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, was intended to broadly share the diverse creativity and appeal of Art Brut within Tokyo. Opening on September 24, 2023, at Sumida Riverside Hall Gallery in Sumida Ward, the main exhibition was held at Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery from October 21, with related events held during this period as well as a special event at Hamura City Lifelong Learning Center Primo Hall YUTOROGI on November 26. The touring exhibition concluded its journey across three Tokyo wards and cities, with its final showing at TAMASHIN RISURU Hall (Tachikawa City Civic Center) Exhibition Room from January 24 to February 7, 2024.

The participating artists included KAMAE Kazumi, HATANAKA Tsugumi, MATSUMOTO Hironobu, MIRUKA, and YAMAZAKI Kenichi, all of whom have exhibited extensively in Japan and abroad, as well as TOMINAGA Takeshi and hideki, two artists whose unique forms of expression have recently begun to receive attention. The exhibition provided a chance to introduce the creative worlds of these seven artists, who have each cultivated highly distinctive styles of expression without the benefit of formal art education.

The exhibition's theme of "tales/stories" originated from considering the narrative elements that represent one typical motive behind the creative work of Art Brut artists and the nature of their works. Rather than the tales of others, the "stories" told by each individual about themselves evoke each person's voice and words, providing opportunities to reveal diverse identities. Today, this is also a significant topic that can empower shifts toward valuing diversity.[1] The fact that many Art Brut works take the form of "stories" told by the "self" of the creator is undoubtedly connected with the essence of this type of art as creations that cannot be separated from the artists' own life stories. On the other hand, when we, who are not the creators, encounter these works firsthand, why are feelings of joy and immersion stirred up within us? Herein, we can capture the qualities and possibility of these works to spark empathy, sharing, and inspiration in others—their nature as "tales." I hope this exhibition gives us cues to think about both the idiosyncratically personal "stories" present in Art Brut works and their universal "tale" qualities, as well as the dynamism between these two aspects.

The "Masato-san" series of works that **KAMAE Kazumi** continues to make with clay at Atelier Yamanami, located in Koka City, Shiga Prefecture, famous for Shigaraki ware, portray idolized figures covered in a texture resembling protuberances or a coat of fur, with gentle and expressive faces like dogū figurines from Japan's prehistoric Jōmon period. While each work represents Masato-san, in this exhibition, we note how each piece has been overlaid with a fictional story as if it were a memory of experiences with Masato-san. The delight Kamae takes in carefully generating these tales, while referring to travel guidebooks, might indeed be at the heart of her creative process.

TOMINAGA Takeshi only began to make automatons out of empty beer cans after reaching his mid-60s, once he had started to live in Osaka's Nishinari Ward. An encounter with Cocoroom, a highly unique art center in the area run by the poet UEDA Kanayo and others, sparked Tominaga's impetus to create. Once the home of day laborers, this neighborhood has aged and is also facing isolation issues. Yet, venues for expression and creativity have been opened up in this community. From the anthropomorphized *Tsutenkaku* helping itself to a drink (Figure 18) to lighting and sound effects using electrical circuits, we can read behind Tominaga's wholehearted desire to bring entertainment through his creative works, the tale of rebirth progressively unfolding in this part of the city.

HATANAKA Tsugumi captures the subtleties of everyday life, using color, form, and words to enchant viewers. The exhibition space featured 48 of her works arranged panoramically, allowing visitors a big-picture perspective on the diverse motifs depicted by Hatanaka. For instance, the exhilarating sight of a street lamp shining in the dead of winter on a night journey; anxiety about the whereabouts of a cat occasionally glimpsed on the road or whether the potted flowers will bloom; the hesitation when choosing fruit at the supermarket—through Hatanaka's works, these fragments of the human psyche are revived, each as its own tale.

hideki's diorama work *Kita-Sendai Station* (Figure 67) stands apart from creative works aiming for "completion," as its form seems destined to change and be updated over time. hideki takes an interest in public structures like roads, buildings, telephone poles, and traffic signals; whenever changes occur around his neighborhood, he goes with his family to observe them. Learning of changes occurring in the actual town or locality, he then approaches his dioramas and attempts unique recreations, using materials like scraps of wood, pieces of plastic model kits, and glue to add elements or clear space. The "stories" unfolding on the stagcve of these dioramas provide endless tales for the viewer.

MATSUMOTO Hironobu creates visual art while referencing illustrated guides and online sources to deepen his knowledge and interests regarding subjects he is curious about. Works on display from Matsumoto included the series *Past, Present, Future* (Figures 78, 79, and 80) graphically depicting the flow of time; a work portraying the first moments of the universe; and works on the subject of historical battles, such as *Kunitori Emaki II* depicting the Battle of Red Cliffs, which appears in the Records of the Three Kingdoms in Chinese history.

Common to Matsumoto's approach is a method of first delineating the outline of motifs with fine lines applied with even pressure, then carefully filling frames partitioned into small sections with either solid color or dotted textures. This method is characterized by Matsumoto's symbolic depiction of subjects combined with a two-dimensionality of the picture plane and a pop art quality. Matsumoto's works unfold "narrative" stories through his unique interpretations of grand themes.

MIRUKA first became enchanted by the colorful world of birds through an encounter with a pet parakeet raised in her home. The many diverse species of birds living across the planet have now become the central motifs in her works. While Miruka cites "cuteness" as her reason for depicting birds, the conviction to render "cute" things is a strong thread running through her creations. This also connects to her passion for anime culture, a wellspring of her contemporary and unique creativity. In her recent pieces, Miruka experiments with projecting a worldview that candidly speaks for herself by, for example, portraying patterns inspired by sweets and manga that she is fond of as motifs standing out against her signature backgrounds crowded with tiny musical notes.

Born in a rural village in Niigata Prefecture, **YAMAZAKI Kenichi** worked on urban construction sites during the height of Japan's rapid economic growth period. Perhaps it was then that he encountered technical drawings made by precisely plotting lines on grid paper using compasses and rulers. In the latter half of his life, spent ill, Yamazaki spontaneously chose grid paper on which to draw meticulous lines akin to drafting diagrams, coloring them in, adding humorous illustrations and cryptic symbols indecipherable to others, and repeatedly depicting the large ships, heavy machinery, and control rooms reminiscent of his past occupation. Intermingled on the same picture planes are vegetation appearing to depict the rice plants and flowers found in landscapes of his hometown countryside—combinations unrealistic yet projecting the story of Yamazaki's early life. Here, perhaps, is to be found the "narrative" of a life story, involving layered expressions as if to affirm his own existence while tracing memories of his personal experiences.

To create an exhibition venue as a space for further dialogue sparked by the creative worlds conveying "tales/stories" of the seven artists as described above, display designs were implemented to embody a park-like space where people gather, based on proposals from dot architects. In addition to talks and workshops featuring diverse guest speakers, a special highlight of related events this year was efforts to expand venue accessibility for people with disabilities, etc. This included offering exhibition tours together with OriHime avatar robots and exhibition tours for visitors with visual impairments, conducted with the cooperation of diverse individuals and organizations. Endeavors by cultural facilities to enhance accessibility, enabling those with various physical and sensory conditions and situations to participate in cultural and artistic activities, have only just begun. Preparations for these events involved discussions with longtime museum volunteering guides and advisors with visual impairments to exchange opinions. Planning the programs while deepening mutual understanding through this interactive communication contributed enormously to the outcomes. Additionally, in a first for one of our touring exhibitions, we collaborated with the Tachikawa venue in holding a concurrent exhibition of works by Art Brut artists from the local community.[2] In closing, I would like to note here the fact that the success of this touring exhibition throughout was made possible by cooperative efforts and partnerships with diverse entities.

[1] Here I refer to Polish writer Olga Tokarczuk's recent reflections on the contemporary polyphonic "narrative" situation. In it, Tokarczuk once again refers to the discovery of the "I" as subject in Western civilization and discusses the "first-person narrative" on which it is based as one of the greatest discoveries of human civilization. It is "*to be an individual, to have a sense of autonomy, to be conscious of oneself and one's destiny*" (Olga Tokarczuk, 2021, *CZUŁY NARRATOR, Nobel Lecture*, translated by Hikaru Ogura and Koichi Kuyama, Iwanami Shoten, p. 8). When considering diversity, it is important to return to the above discussion.

[2] The "Art Brut Tachikawa – Tracing the Paths of Art Walked Together" Exhibition (organized by the Art Brut Tachikawa Executive Committee and co-hosted by Tachikawa City) was held in a section of the Tachikawa venue exhibition space concurrently with the Art Brut 2023 Touring Exhibition.

List of Works

KAMAE Kazumi

● Collection of Atelier Yamanami

1	Masato-san	2009	Clay	33.5×24.4×21.5	●
2	Masato-san in a Tuxedo	2012	Clay	33×39×28	●
3	Me in a Bridal Dress	2012	Clay	30×31×35	●
4	Masato-san	2011	Clay	20×24×55	●
5	Masato-san	2011	Clay	47×47×38	●
6	Masato-san and Me Spending Christmas Day Together	2017	Clay	25×20×15	●
7	Me and Masato-san Eating a Parfait at ISHIYA CAFÉ	2021	Clay	38×21×26	●
8	Me and Masato-san Going to Eat Ramen	2021	Clay	27.5×25×27	●
9	Masato-san Eating Lunch Together at a Picnic	2016	Clay	10×28×55	●
10	Masato-san	2012	Clay	57×28×30	●

TOMINAGA Takeshi

○ Private collection ⊙ Private collection / Commissioned work

11	Sanada Yukimura (If I Don't Drink It, Who Will)	ca. 2017	Mixed media	36×25×18	○
12	Tsutenkaku (If I Don't Drink It, Who Will)	ca. 2017	Mixed media	45×26×26	○
13	Married Couple on Slope	Date unknown	Mixed media	22×15×22	○
14	Santoka	ca.2017	Mixed media	36×25×16	○
15	Tsutenkaku (Life Is Filled with Crying and Laughing)	ca. 2017	Mixed media	28×19×19	○
16	Automaton Rake	2022	Mixed media	68×53×25	⊙
17	Takoyaki Taro	ca. 2020	Mixed media	50×26×26	○
18	Tsutenkaku (If I Don't Drink It, Who Will)	Date unknown	Mixed media	45×25.5×22	○

HATANAKA Tsugumi

■ Collection of the artist

19	Picture of a Tsunami	Date unknown	Crayon, paper	21×29.7	■
20	Picture of a Tsunami	Date unknown	Crayon, paper	21×29.7	■
21	Super Moon "Red Moon"	2022	Colored plastic pencil, paper	27×19	■
22	Super Moon "Normal"	2022	Colored plastic pencil, paper	27×19	■
23	Grand Piano	Date unknown	Crayon, paper	27×19	■
24	Guitar	Date unknown	Crayon, paper	27×19	■
25	Upright Piano	2022	Crayon, paper	38×27	■
26	Blue Streetlight	Date unknown	Crayon, paper	27×19	■
27	Blue Streetlight	Date unknown	Crayon, paper	27×19	■
28	Lavender Field	2022	Crayon, paper	27×19	■
29	Blue Streetlight 1	2022	Crayon, paper	21×29.8	■
30	Blue Neon Lights	2022	Crayon, paper	19.7×27	■
31	Untitled	Date unknown	Crayon, paper	19×27	■
32	Skin-Colored Turtleneck Innerwear	Date unknown	Crayon, paper	21×29.7	■
33	Skin-Colored Not Turtleneck Innerwear	Date unknown	Crayon, paper	21×29.7	■
34	Purple Lipstick	2018	Crayon, paper	29.7×21	■
35	NY Terrorism	Date unknown	Colored plastic pencil, paper	29.7×21.1	■
36	Gas Tank Fire	2019	Colored plastic pencil, paper	29.7×21.1	■
37	Tank Fire 1964 Niigata Earthquake	Date unknown	Colored plastic pencil, paper	29.7×21	■
38	Tokyo Subway Tozai Line	Date unknown	Colored plastic pencil, paper	29.7×21	■
39	Silk Hat	Date unknown	Crayon, paper	29.7×21	■
40	Halloween Pumpkin	Date unknown	Crayon, paper	38.1×27.1	■
41	Iyokan	Date unknown	Colored plastic pencil, paper	29.7×21.1	■
42	Iyokan from Ehime Prefecture	Date unknown	Crayon, paper	29.7×21.1	■
43	Chocolate-Flavored Christmas Cake	Date unknown	Crayon, paper	38×27	■
44	Strawberry-Flavored Christmas Cake	Date unknown	Crayon, paper	38×27	■
45	Cyclamen	Date unknown	Crayon, paper	25.2×18	■
46	Japanese Sparklers	Date unknown	Crayon, paper	38.1×27	■
47	Shaved Ice Blue Hawaii, Shaved Ice Strawberry	Date unknown	Crayon, paper	27×38.1	■
48	Showa 56 Toyohira River (Ishikari River System) Flood	Date unknown	Crayon, paper	25.3×35.7	■
49	Kotonihassamu River [Shin River System]Flood (in 1981)	Date unknown	Crayon, paper	25.5×36	■
50	Asobeach Ishikari's Brown Ocean	2018	Crayon, paper	25.5×36.2	■
51	Field with First Tea of the Season	2019	Crayon, paper	36.5×25.8	■
52	Cold Wintry Wind	Date unknown	Crayon, paper	36.5×25.8	■
53	Really Brown Mountain Range in Autumn	Date unknown	Crayon, paper	25.7×36.5	■
54	Wild Strawberries	Date unknown	Crayon, paper	21×15	■
55	Red Apple	Date unknown	Crayon, paper	21×15	■
56	Untitled (Super Moon)	Date unknown	Acrylic paint, paper	25×35	■
57	Pink Lipstick (1 Stick)	Date unknown	Crayon, paper	29.7×21	■
58	Pink Lipstick (2 Sticks)	Date unknown	Crayon, paper	29.7×21	■
59	Blue Streetlamp	Date unknown	Crayon, paper	25.2×18	■
60	Pinecones (Small and Large Pinecones) <10>	Date unknown	Crayon, paper	29.7×21	■
61	Blue Dog	Date unknown	Crayon, paper	25.7×18.2	■
62	Blue Cat	Date unknown	Crayon, paper	25.7×18.2	■
63	Violet (1 Plant)	Date unknown	Crayon, paper	25×17.5	■
64	Violets (2 Plants)	Date unknown	Crayon, paper	25×17.4	■

65	Flash of Lightning (Thin)	Date unknown	Crayon, watercolor paint, paper	35.6×25.7	■
66	Blue Neon Lights (Thick)	Date unknown	Crayon, watercolor paint, paper	25.8×36.3	■

hideki

■ Collection of the artist

67	Kita-Sendai Station	2023	Mixed media	36×69×60	■
H-S	One side of Kita-Sendai Station, which is being developed inside hideki's home.	2023		Photo by IGARASHI Kazuharu	

MATSUMOTO Hironobu

■ Collection of the artist

68	Supernova Explosion	2012	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	38×54	■
69	Black Hole	2012	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	38×54	■
70	Big Bang	2009	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
71	Kunitori Emaki II	2015	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
72	Kunitori Emaki II	2015	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
73	Kunitori Emaki II	2015	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
74	The Battle Between the Positions of Kato Kiyomasa and Tokugawa Ieyasu	ca.2010 -2011	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
75	The Battle Between the Positions of Kato Kiyomasa and Tokugawa Ieyasu	ca.2010 -2011	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
76	The Battle Between the Positions of Kato Kiyomasa and Tokugawa Ieyasu	ca.2010 -2011	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
77	The Battle Between the Positions of Kato Kiyomasa and Tokugawa Ieyasu	ca.2010 -2011	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
78	Past	2021	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
79	Present	2021	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■
80	Future	2021	Colored pencil, water-based pen, pencil, paper	76.6×108.6	■

MIRUKA

▲ Collection of YELLOW

81	King of Saxony Bird-of-Paradise	2016	Pen, colored pencil, pencil, paper	24.5×35	▲
82	Western Parotia	2016	Pen, colored pencil, pencil, paper	38×54	▲
83	Sun Conure	2017	Pen, colored pencil, pencil, paper	40×58.5	▲
84	Blue Bird-of-Paradise	2017	Pen, colored pencil, pencil, paper	40×58.5	▲
85	Lilac-Breasted Roller	2017	Pen, colored pencil, pencil, paper	38×54	▲
86	Japanese Green Woodpecker	2018	Pen, colored pencil, pencil, paper	40×58.5	▲

87	Resplendent Quetzal	2018	Pen, colored pencil, pencil, paper	72.5×51.5	▲
88	Red Bird-of-Paradise	2019	Pen, colored pencil, pencil, paper	72.5×51.5	▲
89	Steller's Jays	2021	Pen, colored pencil, pencil, paper	39.5×54.5	▲
90	Bald Eagle and Crow	2022	Pen, colored pencil, pencil, paper	39.5×54.5	▲
91	Eastern Bluebird	2022	Pen, colored pencil, pencil, paper	55×79	▲

YAMAZAKI Kenichi

○ Private collection

92	Crane Digging Into the Bottom of a Ship	Date unknown	Graph paper, permanent and non-permanent makers, colored pencil	21×29.7	○
93	Dump Truck with Crane	Date unknown	Graph paper, permanent and non-permanent makers, colored pencil	21×29.7	○
94 -167	Untitled	Date unknown	Graph paper, permanent and non-permanent makers, colored pencil	21×29.7	○
168 -169	Untitled	Date unknown	Graph paper, permanent and non-permanent makers, colored pencil	18.2×25.7	○

主要参考文献

展覧会カタログ
『アール・ブリュット・ジャポネ』展カタログ、2011、埼玉県立近代美術館他、現代企画室
『日本のアール・ブリュット KOMOREBI』展図録、2017、フランス国立現代芸術センターリュー・ユニック
『日本のアール・ブリュット もうひとつの眼差し』展図録、2018、アール・ブリュット・コレクション、図書刊行会
『かたどりの法則』展図録、2019、鞆の津ミュージアム
『ライフ 生きることは、表現すること』展図録、2020、熊本市現代美術館
『絵になる風景』展図録、2022、ボーダレス・アートミュージアム NO-MA

図書、他
岩淵拓郎、原口剛、上田假奈代編著、2008、『こころのたねとして 記憶と社会をつなぐアートプロジェクト』、こたね制作委員会
小林瑞恵、2020、『アール・ブリュット 湧き上がる衝動の芸術』、大和書房
岸政彦編、2021、『東京の生活史』、筑摩書房
岸政彦編、2023、『大阪の生活史』、筑摩書房
代島治彦監督、2009、DVD『日本のアウトサイダーアート8《非現実の王国》』、NPO 法人はれたりくもったり
オルガ・トカルチュク、2021、『優しい語り手 ノーベル文学賞記念講演』(小椋彩・久山宏一訳)、岩波書店
平成 26 年度障害者人材育成資金補助対象事業、2015、『SIGNALED ORCHESTRA 水村英喜「北仙台駅」』、con*tio
矢野智司・鳶野克己編、2003、『物語の臨界ー「物語ること」の教育学』、世織書房
やまだようこ編著、2000、『人生を物語るー生成のライフストーリーー』、ミネルヴァ書房

＊上記文献等の他、各作家、関係者へ行ったインタビュー内容を参考にした。

写真撮影：
柿島達郎 [pp.9-11,14-17,20-23,25-27(no.51,32),28-29,32-34(上),40-41,43-47,50-54,56-68,74]
五十嵐一晴 [pp.27(no.64),30-31,34 (下)-35]
佐藤基 [pp.71,72(詩のワークショップ),73(OriHime 鑑賞ツアー)]

画像提供：
やまなみ工房 [p.13]、鞆の津ミュージアム [p.19]、松本寛庸 [pp.36-39]
社会福祉法人グロー(GLOW)[pp.48-49]

記載のない画像は、東京都渋谷公園通りギャラリーによる撮影

Photo
KAKISHIMA Tatsuro[pp.9-11,14-17,20-23,25-27(no.51,32),28-29,32-34(Upper),40-41,43-47,50-54,56-68,74]
IGARASHI Kazuharu[p.27(no.64),30-31,34 (Lower)-35]
SATO Motoi[p.71,72(Poetry Workshop),73(Exhibition Tour with “OriHime”)]

Photo Courtesy
Atelier Yamanami[p.13], Tomonotsu Museum[p.19], Matsumoto Hironobu[pp.36-39]
GLOW[pp.48-49]

All images without credit are taken by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.